
それでも世界は回ってる

白石レキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでも世界は回ってる

【Nコード】

N6015C

【作者名】

白石レキ

【あらすじ】

剣と魔法と機械と人と……。二人の少年が旅の中で様々な国、町、村、人々と出会っていく話。時々残酷、時々ほのぼの。

エピソードが冷たいカラダ（前書き）

時間軸がバラバラです。

しかもいきなりエピソード（前編）です。
ご理解ください

エピソード② 冷たいカラダ

風が吹いてきた。

とても冷たい風で、顔や手など衣服から露出している部分にその冷えきった空気が触れると、皮膚が凍えるような感覚と共に鈍痛を感じる。

「冷えてきたな・・・」

少年はそう呟いて開ききっていた上着のボタンを一つずつ閉じていく。その間にも風は少年の服の僅かな隙間から入り込み、少年の体温を少しずつ下げていく。

「ふう・・・」

溜息が白い蒸気になって風に流されて、すぐに空気の中に溶けていった。

「もうすっかり冬だなあ・・・一体何回目だろう、旅に出てから冬を越すのは」

そう言っていると、とうとう雪まで降り出してきた。風も更に激しくなり、それは次第に吹雪になっていく。

少年はすぐ近くに吹雪が止むまで過ごすには調度よさそうな洞穴を見つけたので、中に入って焚き火を起こして暖を取った。

寒い中外に出て薪を集めて更にそれに道具も無しで火をつけるのはかなり時間がかかったが、そのままだと凍えてしまうので必死で木を擦って火種を起こして、数十分の後によやく焚き火が完成した。

「はあ・・・アイツが居たら焚き火一つでこんなに手間取ることも無いんだけどな・・・」

火を起こすためにずっと木をグリグリ回していたために、真っ赤になってしまった両手を火に近づける。表面は暖かくなったが、内部はまだ痛みと冷たさが残っている。

「一人つてのは、結構・・・辛いし、寂しいな」

ポツリと少年が呟く。

「ああ・・・何で、こんなことになったんだろう」

ぽーっと上を見上げながら少年がひとりごちた。

手のひらの内部にも熱が伝わってきた。表面が少し熱く感じてくる。

「俺・・・結局何のために旅をしてきたんだろう」

ひんやりとした洞穴の中で木がパチパチと燃える音と少年の声が響き渡る。

「目的のための手段として旅をしてきた・・・つもりだった。でも本当は・・・アイツや他の皆と一緒に旅をしていることが・・・楽しくて、もう・・・それだけで」

洞窟内で木が燃える音だけが響き渡っていた。

「命懸けて戦ったり、財宝探して探検してみたり、困ってる人を助けてみたり・・・そんな日常が、楽しいものだと感じるようになってしまった。嫌な事だっただくさんあったけど、それも全部ひつくるめて旅を楽しんでいる自分が居た・・・」

カツカツと足音が洞窟の入り口の方から聞こえた。ゆっくりだが近づいてきている。

「それもこれも、皆が居たから・・・」

脇腹の傷口から溢れ出てきて、すっかり冷え切っていた血が乾燥してそれ以上の出血を防いだ。

少し体を捻ろうとすると鋭い痛みが全身を走って、少年の表情が歪む。

「ああ、ちょっと苦しくなってきたな・・・目が霞むし、それに眠い・・・」

少し自嘲気味に少年は片手で腹部を押さえながらそう言った。

「でも、それももうすぐで解放される・・・もうすぐ」

足音が段々と大きくなってきている。

「せつかく逃げたのに、もう追いついてきたよ・・・やれやれ」

少年はよろめきながら立ち上がり、腰に差した剣を抜く。だが、立っているのも辛い様子で足元が覚束なかった。

「だめだ・・・足がもう、言うこと聞かない」

フツと笑ったあと、少年はその場にドカツと座り込んだ。

「いいや、止めておこう・・・今の俺が何かしたところで・・・余計に苦しくなるだけだ」

段々と五感が鈍くなってくる。目はもう殆ど見えなくなり、もう痛みと足音と焚き火の音しか感じ取れるものが無い。

「とりあえず・・・もう寝よう、・・・疲れた」

少年はその場に蹲りゆっくりと目を閉じる。

風が吹いてきた。

冷たいが、どこか温もりを感じる変な風だった。

その風が洞窟の中を満たし、少年を包み込む。

1-1「道を歩く、僕らは」(前書き)

エピソードとまた時間軸が大きくなります

1-1「道を歩く、僕は」

無駄なこともかもしれない

私のしていること、しようとしていること、思っていること
全てが意味の無いことかもしれない

何をしたところで死んだ者は生き返ることは無く

私の中の悲しみも苦しみも消えることは無いのだろう

罪とは償うものではないのだ

償うことで許しを求めるものではないのだ

罪を受け入れ、罰を受けそれに報いて背負っていく

罪とは決して消えることの無い烙印なのだから

罰とは一時的なものではなく、その者の心に重く押し掛かり
いつか潰してしまうものなのだから

許されようなどとは思ってはいけないのだ

償ってそれで終わりだとは思ってはいけないのだから

悪かったなどとは思っていない

そう思った思いは許されようと足掻く愚かな自己防衛本能だから
もしあの時“本当に”そう思っていたら

今の私とは違った私がいたのだろう

間違ったことだとは思っていない

あの時も、そして今も、これから

だがこの虚しさはなんだろう
この悲しさはなんだろう

結局私には正しい道など用意されていなかったのかもしれない
どの道も私を幸せにはしてくれなかっただろう

だからせめて私は死ぬまでに作ろう
迷うことなく歩める道を

そうすることで少しでも苦しみが和らぐのならば、忘れられるのならば

私はただただ道を作っていこう

シオンとリドルという二人の少年が居ました。

シオンは黒髪で年は十代半ば、体格は普通で精悍な顔付きの少年で
黒のジャケットに紺のジーンズをいつも着ています。

リドルは銀髪でシオンより年下で、体格は年齢の割に少し小さな少年
年で白のフード付きのパーカーに黒いパンツをいつも着ています。

二人は平地を歩いていました。ところどころに雑草や花が生えていて
赤茶けた大地に模様を描いて、あとは何もありませんでした。

道がでこぼこしていたので歩いていると二人は段々と足が疲れて、
リドルが先に根をあげました。

「疲れた」

リドルがぼやきました。シオンは無視して歩きます。

「疲れたなあ」

リドルがひとりごちました。シオンは無視して歩きます。

「・・・・・・・・」

リドルは無言でその場にしゃがみ込みました。シオンは無視して歩きます。

「疲れたんだけど」

少し大きな声でリドルが喚きました。シオンは無視して歩きます

「・・・・・・・・」

シオンは無視して歩きます。

リドルは観念して立ち上がってシオンの元へ走っていきます。

「もう二時間近く歩き続けてるんだけど」

「一時間だ」

「足が棒のようなんだけど」

「気のせいだ」

「そろそろ休まない？」

「いや、もうちょっと頑張ろう。次の町まではまだ結構歩くと思うから、あんまりゆっくりしていると日が暮れてしまう」

二人はただひたすら歩きます。

リドルはまたぶつぶつと文句を言っていました、いつものことなのでシオンは無視しました。

更に一時間ほど歩き続けると、荒れたでこぼこ道が途中から誰かに整備されたかのようにならかな地面の道に変わりました。

「変だな、地図にはこのあたりに町や村なんか無いはずなのに」

「でも歩きやすい、それはよいことだよシオン」

「そうか、ならあと一時間くらいは・・・」

「でもそろそろ休もうシオン、急ぐことも大事だけど適度な休息も必要だよ。“急いては事を仕損じる”というやつだよ」

リドルはシオンの言葉を途中で遮るようにして、もっともらしいことを言ってその場に座り込みました。

最後の言葉に関しては意味が少し違いましたが、本人は「してやつたり」というような得意顔です。

シオンは「お前が言うと言得力がまるで無い」と言おうかと一瞬思いましたが、何だかもう色々と自分も疲れてしまったのでやっぱり止めました。

近くにあった岩場に座るのに具合がよさそうな岩があったので二人はそこに腰掛けました。

「結構遠くまで来たなあ」

「そうだね」

二人はまだ旅を始めてまだ間も無く、三日前に村を出たばかりです。

「まだ不安だよ、旅を続けられるかどうか・・・」

シオンは少し困ったように笑いました。

「でも、ここまで来れた。この先どこまで行けるか分からないけど、僕たちはここまで来れたんだよ」

リドルが少し嬉しそうな顔で言いました。

「そうだな」

シオンも顔を綻ばせました。

しばらく休んで二人はまた歩き出しました。道が平坦なのでとても歩きやすく、リドルが喜んでいました。

「でも何でこのあたりは道がこんなにキレイなんだろうね」

タンタンと地面を足で叩くように踏みながらリドルが言いました。

「さあ・・・誰か人が住んでるんじゃないか？」

「ふーん、まあいいや」

リドルにとつては「歩きやすい道」であるだけで充分なことで、理由はどうしても良かったのでした。

更に歩いていくと、小屋が見えてきました。とても小さな木の板でできた粗末なもので、ちよつと人が住んでいるとは思えがたい小屋でした。

「あそこに住んでる人が道を整備したのかもね」

「どうだろうな、行つて聞いてみるか？」

リドルは少し悩みましたが、結局気になつて仕方がなくなつたので行つてみることにしました。

「ごめんください」

リドルがドアを叩きましたが小屋の中からは反応がありません。しばらく待つても中から物音が聞こえてくる様子はありませんでした。

「留守みたい」

「あるいはもう誰も住んでないのかもな」

「うーん、じゃあ誰がこの道を・・・」

もう一度ドアを、今度はもっと力強く叩いてみましたがやはり反応がありませんでした。

「うー・・・」

もう一度だけ・・・とリドルはドアを叩こうとしましたが、やつぱりやめました。この道ができた理由と道を作った人のことが気になつて仕方がありませんでしたが、諦めて先に進むことにしました。

整備された道を更に歩き続けると、人が居るのが見えました。

近づいて見てみると、それは一人の男性でした。少し年をとつていて顔にはしわがいくつも見えました。

男性がこちらに気付いて手を振ってきました。リドルが元気よく手を振り返します。

そのあと男性は手にスコップを持って何かの作業を始めました。遠くからだとよく分かりませんが、何かを掘っているようです。

「行つてみよう」

リドルが男性のもとに走っていきました。シオンもそれを追いか
けます。

1-1「道を歩く、僕らは」(後書き)

リドル「50メートル走では六秒台です、えへん」

シオン「俺は五秒台」

リドル「・・・」

1・2「これからできる町」(前書き)

リドル「お茶と煎餅が好きです」
シオン「ラーメン、特に味噌」

1 - 2 「これからできる町」

「こんにちはっ」

リドルが元気よく男性に挨拶しました。

「やあ、こんにちは。旅人さんかな？」

男性も笑顔でリドルに挨拶しました。

「はい、といつてもまだ駆け出しの身ですけどね」

追いついてきたシオンが代わりに答えました。

「この道はあなたが整備したんですか？」

シオンが聞いたら男性はまた嬉しそうな笑顔で答えます。

「ああ、私は・・・ここに町を作ろうと思っているんだ」

「町を・・・ですか？」

男性は頷いてシオンたちに話し出しました。

自分も遠く離れた国からここまでやってきた旅人だったということ、旅の目的は自分が住みやすい場所を探すためだったということ。

そして今は旅を止めてここでたった一人で町を作ろうとしていることを、シオンとリドルに話しました。

「若いころはね、ここは俺の居るべきところじゃない、もっといい所があるはずだ・・・ってあちこち旅して回ったんだけどね。どこの国や町、村も私には合わない感じがしてね・・・。結局何所にも移住しないでこうしてここで町をつくらうなんて馬鹿げた事をやってるわけさ」

「でもさおじさん、何でここに町を作ろうと思ったの。他にもっと条件の良さそうな所とかいっぱいありそうな気がするんだけど・・・。ここってほら、まず道がひどいじゃん」

リドルがあのでこぼこ道を思い出して、「もううんざりだ」と言わんばかりに嫌そうな顔をしました。

「ははは・・・そうだね、私も何を思っでこんな所に町を作ろうと思っただろうね」

男性は空を見上げながら少し考えました。

「うーん、そうだな・・・こんなところだから作ってみようと思っただのかも知れないな」

「はあ、物好きだねえ・・・おじさんも」

「失礼だぞ、リドル」

「ははは、いやいいんだ。自分でもそう思うから、うん」

「しかし町を作ると言っても・・・一人だと難しいんじゃないですか？」

シオンが聞きましたが、男性は笑っていました。

「そうだな、下手したら私が死ぬまで町なんてできないかもしれない。でもそれでもいいんだ、いつかここに町ができれば・・・それで」

男性は遠くをじっと見て、そう言いました。

男性が目を細めるとしわが寄って、急に年老いたようにシオンには見えました。

「僕たちがここで旅を止めることはできませんが、ただ」

「・・・ただ？」

「いつかあなたが生きているうちに町ができることを願います」

「ありがとう、私が生きているうちに君たちが私の・・・いや、私たちの町に来てくれることを願うよ」

「次の町に着いたらこのこと伝えるよ、できるだけ多くの人に」
リドルがそう言うとき男性は、

「ああ・・・ありがとう、本当に君たちはいいい子だな。こんな私にそんなに優しい言葉をかけてくれたのは初めてだよ、ありがとう・・・
・ありがとう」

目からポロポロと涙を流しました。

「ここからだあと二時間もしないうちに町に着くはずだ、私の作った道が途中まであるからそれを頼りに行くといい。道が終わる頃にはもう町が遠くに見えてくるはずだから・・・ああ、あとこの先に最近野盗が出るらしいから気をつけて」

「ありがとうございます、どうかお元気で！」

「何年かしたらまた来るよー」

「ははは、その頃には私はお爺さんだろうなあー、きっと」

そう言つて男性は手を振つてシオンたちを見送りました。

リドルもシオンも振り返つてしばらく男性に手を振つたあと、また前を向いて歩き出しました。

「いい人だったね」

「ああ、いい人だった。とても」

もうあの男性も、あの小屋も見えなくなった頃にリドルとシオンが言いました。

キレイな道を歩いていくと、遠くに町らしきものが見えてきました。あの男性に言われたとおりで、そこからは道がまたでこばこしていました。

「うう、またこれか・・・」

「・・・少し、休むか」

リドルが驚きました。

「珍しい、雨でも振るんじゃないだろうか」

シオンが訝しげな顔をしてリドルを見ました。

「何だよ」

「いえいえ、お気遣い感謝します」

岩場に腰掛けて二人は少し遅めの昼食をとります。味気ない保存食

と水ですが、無いよりマシなのでゆっくり味わうようにして食べています。

「しかし、よく一人で町なんか作る気になったよなあ・・・」

「すごいよね・・・僕には真似できないよ、とても」

最後の一口を食べ終わったりドルがそう言っで、水を一口飲みました。

「さて、じゃあ・・・そろそろ」

シオンが立ち上がって辺りを見回しました。大小様々な岩がそこら中に転がっています。

中には人ひとりが隠れられそうなほど大きなものもいくつかあります。

「出てきてくれませんか？」

1・2「これからできる町」（後書き）

リドル「読書が趣味です」

シオン「料理、こいつが好き嫌い多くせに味に五月蠅いから」

リドル「こう見えても育ちがいいからね、ふふん」

シオン「なのにお茶と煎餅が好物なのか」

リドル「だってあれ美味しいもん」

シオン「さいで」

1 - 3 「彼らの作る町」 (前書き)

リドル「商人ばかり集めると商人の町になったり・・・」

シオン(・・・?)

リドル「神父さんやシスターばかり集めると大聖堂になったりするよね」

シオン「何の話だ」

1 - 3 「彼らの作る町」

「だいたい10人くらいですか、岩の陰に隠れているんでしょう？」
シオンがそう言うと、本当に岩陰から人がぞろぞろと出てきました。
だいたい10人くらいでした。

「いつから気付きましたか」

でてきた中の一人が聞きました。

「確信したのはあの人が“私たちの町に”と言った辺りからですね。
それまでは動物か何かだと思っていました」

「なるほど、ならば私たちがどういう存在なのかはわかりますか？」

リーダー格の男性がシオンに聞きました。

リーダーの質問にシオンは正直に答えました。

「いいえ、でも興味はあります」

「うん、気になる。できれば聞いておきたいな」

リドルも正直に言いました。

「どうやら“彼”にも気付かれているようなので、お話ししましょう。
まず私たちは野盗ではありません・・・見た目がこんなですが」
着ていたボロボロの衣服を手ではためかせて、リーダーが言いまし
た。

他の仲間たちはそれぞれ適当な岩場に腰掛けました。

シオンとリドルも座りなおしました。

「私たちは彼のいた国からやってきました、彼を見守るために」
リーダーは少し間をおいたあと、話を続けます。

「彼是我々の国では英雄と言っていい程の存在でした。それだけ偉
大な武人だったのです・・・」

「続きを、お願いします」

「はい、彼是我々の国の王国軍に属していて・・・かつての我々の

部隊長でした。彼はとても強く、そして賢く……優しくあり、我々にとっては素晴らしい上官でした」

「しかし、ある日国内で内乱が起きました。首謀者は彼の幼馴染で同じ村で育った、彼の親友でした」

風が吹いてきました。砂埃を巻き上げ、一瞬だけ視界が悪くなりました。

そのとき、シオンにはリーダーの目から何かが零れたように見えました。

「彼は迷いましたが親友と、自分の育った村を焼き払いました。その時私たちは彼の判断は間違っただけで、はなはだしく思っています。でも、彼は悔やみ続けました。“自分は何のために今まで戦ってきたんだ”……と」

他の仲間たちも悲しい表情を浮かべていました。何人かは涙を流しています。

「内乱の首謀者である彼の親友と村が壊滅したことで内乱は終わりましたが、彼は軍を辞めて国を出ました。“もうこの国にいる理由が無い”と、そう言って」

「ならあなた達は、どうしてここに居るんですか？」

シオンが聞いたなら、リーダーは笑顔で答えます。

「私たちも、その村で育ちましたから」

「……」

「続き、話してもいいですか？」

シオンとリドルは少し驚いた顔をして

「え……」

「あ、はい……どうぞ」

と、言いました。

「それから色々あって、我々は彼を影から見守ることにしました。

彼は私たちを必要とはしていませんから余計な手出しはしたくなかったのです。でも、私たちには彼が必要だった・・・だから我々も国を出ました。家族はこの部隊でしたから」

「彼は、気付いているんでしょうか？」

「はい、恐らく・・・でも気付いていないふりをしているのでしょう。でもいいんです、これで」

風が冷たくなってきました。もうすぐ日が暮れて夜になってしまいます。

「ああ、もうこんな時間ですね。こんな下らない話に時間をとらせて申し訳ない」

「いえ・・・お話が聞けて、とても良かったです」

「これからまあのおじさんを見守ってくの？」

リドルが聞きました。リーダーとその仲間は全員笑顔で頷きます。

「ええ、もし彼の邪魔をしようとするものがいたら・・・。そのために私たちがこうして野盗に扮してるわけですから」

「最後に、一つだけ・・・いいですか」

シオンがリーダーに言いました。リーダーは「どうぞ」と頷きました。

「彼は、どうして軍に入ったんですか？」

シオンがそう言ったら、リーダーは声を上げて笑いました。

「ははは・・・あなたはとても賢い人ですね。彼から昔聞きました・・・“大切な人たちを守るため”だそうです。因みに彼の親友・・・女性です、彼がその女性の写真をいつも大事そうにしていました」

「そうですか・・・」

「では、私たちはこれで。他の小隊と合流する時間ですので」

「僕たちもそろそろ行きます。・・・いつか、ここに町ができる頃に、また」

「ええ・・・また、会いましょう」

でこぼこして歩きにくい道を、シオンとリドルはひたすら歩きます。

「ちょ・・・待って、シオン」

「早くしないと夜になる、もたもたしてたら置いてくぞ」

シオンは数メートルほど後ろでガラガラ歩いているリドルを無視して先に進みます。

「別にここに野盗とかが出るわけじゃないんだから野宿でも・・・」

「俺はふかふかのベッドで休みたいんだ、何としても」

「じゃあ、シオン一人で行ってよ・・・僕は一人でのじゅ・・・」

ガサガサと何かがうごめく音がしました。

「ひっ」

それを聞いてリドルは飛び上がって、すっかり離れてしまったシオンの方へ駆け出します。

「待って、やっぱり僕もふかふかベッドがいいiiiiiiiiii」

冷たい風が吹いてきました。

砂埃が舞い上がって、視界を遮ります。

それでも構わず二人は歩き続け砂埃がおさまり視界がよくなると、もうすぐ近くに町が見えてきました。

二人は歩き続けます。

つづく

1 - 3 「彼らの作る町」 (後書き)

<あとがきタイムズ>

ようやく終了第一話(・・)

次回は剣やら魔法やら色んなバトルが展開されます

2 - 1 「夢の国」 (前書き)

バトルあり。死を比喻する表現あり。グロでは無いです

2 - 1 「夢の国」

醒めない夢、悪夢

終わらない悪夢、恐怖

永遠の恐怖、死

まどろんだ世界の中、私は夢を見る

理想の世界、理想の国、理想の民

夢の中では私はその世界の王となり、全てが私の意のままに

その私だけの世界も、少しずつ・・・

蝕まれ、侵食されていく

飲み込まれていく・・・

消える・・・私の世界が、私の国が・・・

溶けて消える・・・

「不思議な国だ」

シオンが言った。

「不思議な国だね」

リドルが言った。

不気味なほどに人が少なくて、不気味なほどに静かで、不気味なほどに風も無く生暖かい空気が体に纏わり付いてくる。

とても、気持ちの悪い感じの国だった。

中に入っただけだとすると、薄気味悪い感覚も和らいできて、代わりに微かな眠気が二人の表情に表れはじめて、ゆっくりとまどろみの世界に足を踏み入れる。

二人は“夢の国”と呼ばれる場所に来ていた。

国といっても広さは少し大きな町といったところで、中心部に城があつてその周りを城下町が囲み、更にその周りを高い城壁が囲む。単純な構造だった。

「にしても何で“夢の国”なのかね」

リドルがぼやいた。本人はこの国をとて豊かな楽園か何かと思ひ込んでいたらしい。

「門番の兵士が言っていたな、ここは国王の夢が作り出した国だ・・・って」

「なんだそりや、随分と詩的だねえ」

「いや、もしかしたら本当かも知れないぞ。この国は国王の見ている夢が具現化したもの・・・だとか」

「まっさかー」

二人は最初は冗談だと思っていた。

しかし、城下町を歩いているうちにこの国の異質な何かを感じ取った。

道行く人の顔を見てもみるのだが、どうも皆元気の無さそうな表情をしている。すれ違う人の全てが下を向いて暗い表情を浮べて、よろよろと歩いていく。

「ど、どうしたんだろうね、この国の人たちは」

「皆揃って嫌な夢でも見たとか」

「まっさかー」

「・・・だよな、でも何かがおかしい。この国何かあるぞ・・・きつと」

「ま・・・まつさかー」

シオンが真剣な表情になったのを見て、リドルは不安になってきた。

門番と話したときから何かが妙だった。

城壁に囲まれた国の入り口で、たった一つしかない城門を二人の兵士が見張っていた。

遠くから見ると城門が陽炎のように時々歪んで見えたのだが、目の前まで来てみると城門はしっかりとそこにあるのが見えた。

「ようこそ」

門番がシオンたちを見ないで、どこを見ているのか分からない目をしながら言った。

「ようこそ」

もう一人の門番も口以外は微動だにせず、シオンたちに感情が全くこもっていない声で入国を歓迎するかのような台詞を喋った。

「この国は夢の国、王の夢が作り出すそこにあつて、そこに無い国」
二人の門番が同時に、同じ声で、同じ喋り方で二人に言った。

言い終わると同時に大きな城門がまるで自らの意思を持っているかのように、勝手に開いた。

「あの、これって・・・入国許可ということですか？」

シオンが門番に聞くが、門番は全く反応しない。

「・・・ま、いいか」

「うーん、変な国だなあ・・・。さつきから頭がぼんやりするし・・・」

「俺も、なんかだるい・・・。さつさと宿とって寝るか」

「さんせえーい・・・」

二人が門をくぐって中に入ると、城門がゆっくりと閉まり出した。

「う、あ・・・ああ・・・」

門が閉まっていく中、二人の門番が呻き声をあげながらその場に蹲

る。

「あ」

門が完全に閉まりガタンという大きな音を立てた瞬間に、二人の門番が一瞬で溶けて消えた。

鎧や服はそのまままで肉体だけがいきなり赤い液体に変わって、ボタボタと地面に落ちる。

2 - 1 「夢の国」 (後書き)

リドル「僕ね、いつか海賊王になるんだ」
シオン「そうか、まあ頑張れ」

2 - 2 「魔導師、導くもの」(前書き)

説明台詞 GJ な回

裏タイトルは「教えて！リドル先生」

2 - 2 「魔導師、導くもの」

陰鬱な空気の立ち込める中、シオンとリドルは宿を探して歩き回る目の前にふらふらと道を歩いている男性がいたのでシオンは話しかけてみた。

「すいませんがこの辺りに泊まれるところは・・・」

「あ、ああ・・・だめだ、眠い、眠い・・・寝たら、寝たら俺もきつと・・・」

「いや、だから泊まるところを・・・」

「だめだ、寝ちゃ駄目なんだ・・・寝たら・・・ああ・・・」

「・・・失礼します」

男性はまるで寝言でも言っているかのように、途切れ途切れでどもつた口調で喋った。

その後何人が当たってみたが、誰も彼もが似たような答えを返してきた。

「うう、何なんだこの町は・・・会う人会う人に話を聞こうとしてもまともな答えがまるで帰って気やしない」

「何か事件か何かが起きたんじゃない？」

「まさか、国民全員が寝ぼけてるとか・・・は無いだろうなあ」

目をこすりながら眠気と闘いながらまともに話ができそうな人を探す。

しかし会う人は皆足元が覚束ない状態でふらふらと歩いている、本当に寝ぼけているような人ばかりだった。

そのうちの一人が突然歩くのを止めた。

「う・・・あ・・・来るな・・・」

その場に崩れ込んで呻き声をあげる。

それを見たシオンとリドルは今までの人間とは違う行動をとったその一人、まだ若い青年の様子をじっと見ていた。

「あ、ひ・・・駄目だ・・・やめ・・・」

青年が何かに怯えるようにその場から後ずさった、次の瞬間

「てっ」

青年の体が赤いドロドロした液体に変わって、弾け飛んだ。

衣服はそのまま、赤い水たまりの上に青年の着ていた服が浮かんでいる。

赤い液体はどうやら血ではないようだ、別の何からしい。

この光景を見てシオンとリドルは一瞬何が起きたか理解できなかった。

「え・・・何、今の」

リドルが口をパクパクさせながら、やっと言葉を紡いだ。

「ひ、ひが・・・人が、溶け・・・あ・・・んな・・・に・・・」

シオンも流石に動揺してまともに話せなかった。

しばらくしたら赤い液体は地面に吸い込まれていった。

土に吸収されたというよりは、何か別のものに取り込まれたという感じだった。

「一体・・・何なんだよ、あれ・・・」

「人が、眠たそうにしてて・・・でも寝ちゃ駄目だって言って・・・そしたら、あんな風に溶けて・・・ああ、もう何が何だか・・・」

シオンとリドルが慌てふためいている時に、後ろから他の人間たちとは少し違う足音が聞こえてきた。しっかりと足取りのように聞こえた。

「・・・っ誰だ！」

シオンが叫んだら、足音が止まった。

後ろを振り向くと男性が立っていた。スーツ姿の長身でがっしりした体格の中年男性だった。サングラスをかけている。

「おう、俺だ」

スーツの男は意味不明な返事をした。

冷静さを欠いているからか、気付くのが少し遅れてしまった。

恐らくこの男が敵で、それなりの実力の持ち主だったらシオンカリドルがとも生きてはいけないほどの傷を負わされていただろう。

「お、俺って言われても・・・」

リドルが少し怯えながらスーツの男に向かって弱弱しく言った。

「おうおう・・・悪い、名乗ってなかったな」

ガハハと笑いながらスーツの男は両手を腰に当てる。

「俺の名はビドゥー、一昨日この国に入ったばかりだ。連れが二人いる」

「ビドゥー・・・さん？」

「おう、お前らは？」

「あ、はい・・・シオンといます」

「り、りど・・・リドルです」

ビドゥーと名乗る大男の雰囲気気圧されて二人は少し怯えながら名乗った。

「シオンとリドルか。まだガキだったのによく旅ができるな。やつ

はお前らもあれか、“魔導師”か」

シオンの知らない単語が出てきた。

「マドウシ？」

「え、シオン知らないの？」

リドルは知っている風だった。

「魔導師ってのはね、魔力を導く者のことで・・・要するに魔力を

自在に操れる人のことだよ」

「魔力つてのは？」

「・・・本当に知らないんだね、シオン」

珍しいこともあるもんだとリドルはシオンを馬鹿にするわけでもなく、本当に驚いていた。

「まあいいや、魔力つていうのは精神エネルギーのことで普通の人の目には見えないけれど空気中にも人の体内にも、どこにでもあるんだよ」

「ふーん、まるで酸素が何かみたいだな」

「まあ、そう考えたほうが簡単だよな。で、それを自分の意思で操ったりできるのが魔導師」

「で、魔力を操れると何ができるんだ？」

「そうだね、色々あるけど・・・身体能力の強化とか魔具を扱えるってことかな、とりあえず」

「魔具つて？」

「魔法道具の略だよ。魔法や魔術なんかが使えない人でもそれを媒体にすることで魔法を使えるんだ」

「何かまた出てきたな、魔法と魔術って何だ。何か違うのか」

シオンがそういった後リドルが何だか目を丸くしてシオンをじーっと見ていた。

「・・・なんだよ」

「いや、シオンの質問があまりにも的確すぎて感心した。おかげで説明がスムーズだよ」

「ほっとけ」

「・・・で、話を戻すね。魔法つてのはまあシオンも知ってるような火とか氷とか風とかを生み出す能力のことだよ。呪文や魔法陣とかで使えるやつね。・・・で、魔術つてのはそれとは違った特殊な

能力で人によって使える魔術が違っただ」

「・・・例えばどんな？」

「うー・・・僕は魔術なんて使えないから良く分からないけど、どんなものでも液体に変える能力とか逆に固体にする能力とか・・・」

「何か使い勝手が微妙だな」

「でも魔法と違って魔力を操るのが上手くなくても使えるし、上手く使いこなせば強力・・・らしいよ」

「そう本に書いてあったのか」

「うん」

「お前本好きだからなー」

「おう、話が十分それてるんだが、そろそろいいか？」

「あ、ご・・・ごめんなさい。ビミヨーさん」

リドルがビクツと震えて驚いたあと、ビドゥーに謝った。

「ビミヨーじゃねえだろ・・・」

小さくリドルに耳打ちした。リドルは「しまった」という顔をした。

「おう、いいんだ別に。そんなビビんな、俺が傷つく」

ビドゥーは全く気付いていなかった。

「・・・いや、何かもう・・・すいません」

シオンとリドルが同時に謝った。

「ガハハ、だから気にするなって」

とりあえずもう一度二人は謝っておいた。

すっかり二人の緊張感は消え去ってしまった。

2 - 2 「魔導師、導くもの」(後書き)

リドル「さて、みんな分かったかな？次回は四つのクリスタルと暁の戦士について教えるよ」
シオン「5かよ」

2・3「ペドラー」(前書き)

・(「むちゃくちゃな振り仮名の技名とかに懂れます」

2・3「ビドゥー」

「おう、とにかくお前らが魔導師以上であることは確かだ。でなきやとつくに夢魔にやられてる」

「夢魔って、あの夢魔!？」

夢魔という言葉にリドルが驚いた。

この世界では夢魔とは人の夢に入り込んで、悪夢を見せて弱らせたあと魂を喰らう悪魔の一種である。

ある国では病として恐れられ、ある国では神の祟りとして恐れられている。

そして夢魔は一人を喰らったら次の獲物にまた乗り移る。

「こんなにたくさんの人が同時に・・・ってことは・・・」

それだけの数の夢魔が居るという事だった。

恐らく千や二千では済まない数なのだろう。リドルとシオンは恐怖した。

「だが、実際にこうしてそこら中に夢遊病みたいな状態の奴らがいるんだ。信じるしかねえだろ」

ビドゥーが親指で後ろを指差す。

彼の後ろでは呻き声をあげながらふらふらと歩き回る町の人間が数人いた。

「来るな来るな来るな・・・あ、」

ビチャッ

また一人溶けて消えた。

「ゆつくりと夢魔が近づいてくる恐怖。夢の中で奴らが身体に触れた瞬間に身も心も溶けて消えちまうんだ」

ビドゥーが消えていく人たちを嫌なものでも見るようにして眺めていた。

「なんにしてもこの状況は異常だ、ここにいたら俺たちも危ねえしさつさと逃げ出したいところだが・・・」

ビドゥーが遠くに見える城を眺めていた。

シオンとリドルにはその眼は悲しそうにも、静かな怒りを秘めているようにも見えた。

「まあ、こっちの事情でそういうわけにもいかなかったんだな」
シオンがその事情とやらを聞こうとしたが、ビドゥーの眼を見たら聞けなくなった。

少し涙が出ているのが見えた。

「ねえ、ビドゥーさんの仲間って・・・」
リドルが聞いた。とても嫌な予感がした。

カツカツと石畳の上を誰かの歩く音が響き渡る

「たす、たすけっ」

バチュンッ

町中に敷き詰められた石畳の道が段々と赤く染まっていく。
悲鳴と共に。呻き声と共に。

「・・・っ」

シオンが齒を食いしばっている。

悔しさをこらえているようだった。

「悔やんだところで止まったりはしねえよ」

シオンの様子を察したビドゥーがそう言った。

「逃げたきや逃げな。だが城門は閉まつてゐるぜ、中からは開けられねえ」

何所からかまた呻き声が聞こえてきた。

「ねえ、さつきから気になつてゐるんだけど・・・」

リドルがシオンを心配しながらもビドゥーに話しかけた。

「おう、なんだ」

リドルがそわそわとした様子で周囲を見回す。何かを探しているようだった。

そしてその“何か”は見つからなかった

「子ども・・・子どもがいないんだけど、あとお年よりも少ないし」
リドルの言つとおり、辺りにいるのは若い男女だけであつた。年よりも殆どいない。

ビドゥーの方が自分たちより状況を把握していると思つてリドルは質問した。

本当は何となく答えが分かつてはいたが、それが正解でないことを願ひビドゥーの意見を求めた。

その話を聞いてビドゥーはゆっくりと溜息をついたあと、

「・・・多分だ、多分だがな」

ゆっくりと口を開く。表情が真剣だった。

「夢魔が喰うのは正確には夢じゃなくて人のココロ、精神だ」
ビドゥーが淡々と二人に説明をする。

「だからな、精神力の弱い奴ほど先に喰われちまうんだ・・・分かるか、言ってることが」

ビチャ

「あんだ、平気なのかよ」

シオンがビドゥーに言い放つ。普段は使っている丁寧語が普通の話し口調に戻っていた。

「よくこの状況でそんなに冷静でいられるな」

ビドゥーは何も言わずにシオンを睨む。

「こんだけたくさんの人が死んでるんだぞ」

「死んでるんじゃないねえ、吸収されてるだけだ」

「同じことだろっ！」

シオンが少しキレかかっていた。リドルが止めようとするが睨み合う二人の前に尻込みしてしまう。

「おい、シオン」

ビドゥーがゆっくりと口を開いて話し出す。

シオンは今にもビドゥーに殴りかかりそうな勢いだった。

「お前、俺が今・・・冷静だったな」

ビドゥーが拳を握り締めた。

「俺が今、この状況下で“平気”だと・・・そう言ったな」

更に強く握り締めた。

ビドゥーが急にリドルの方を向いた。リドルが一瞬驚いてビクッと震えた。

表情以上の強い怒りと、無念と、悲しさを感じられたからだ。

「リドルよお、さっき俺の連れがどうか聞いてたな」

声を出すのも怖くなったリドルが首の動きだけでイエスと答える。

「俺の連れはよ、一人は昔から一緒に馬鹿やってたダチでよ。旅に
でてから今までずっと何十年も一緒にやってきたんだ」

表情は少し穏やかになるが、握り締める拳からは血管が浮き出てい
た。

リドルは気付いてしまった。

最初は彼らは理由があって別行動を取っていると思っていたが、そ
れは間違っていた。

理由なんて無かった。でも、別行動を取っていた。
考えられる答えは、

「もう一人は・・・なんつうんだ、その・・・昔から俺とそのダチ
によく引っ付いてきて小言ばっか言いやがる口うるさい奴でよ。女
なんだが俺たちが旅に出るときにどうしても付いていきたいって言
うんだよ」

シオンも気付いた。

気付いてしまった瞬間にビドゥーに対する怒りが全てどこかに消え
てしまった。残ったのは虚しさだけだった。

「足手まといにしかならなかったよ、正直。戦闘や力仕事は俺で、

料理なんかは相棒がやっていた。その女は体術もできなければ家事もできなかった」

ビドゥーの表情が穏やかになる。拳を握り締める力も少しだけ弱くなる。

「でもな、それでも居てくれて良かったと思ってる。散々言い争ったりしたけども、よく考えたらガキの頃から三人で居ることが多かったんだよなあ・・・」

ビドゥーが上を見上げた。ぼんやりとした灰色の空が広がってこの国を覆いつくしていた。

そのまましばらくビドゥーは黙って空を見続けていた。何も言わず、ずっと。

「俺だけなんだ、魔導師だったのは」
ビドゥーがポツリと呟いた。

『魔力に対して抵抗力があるのは、魔導師以上の力を持った者だけ』
抵抗力の無い人間は

ビチャ

ビドゥーは再び強く拳を握り締めた。
その隙間からはポタポタと血が滴り落ちてきた。

2・3「ビドゥー」(後書き)

ビドゥー「おう、鉄板をパンチで突き破れるぜ」
リドル「貴方は化け物ですか」

2 - 4 「アルプ、白き夢魔」(前書き)

夢魔の外見

何か幽霊みたいな感じにとらえてください
半透明の身体にひらひらの衣装です、はい

2 - 4 「アルプ、白き夢魔」

「・・・だからな、とつくに泣いたし喚いたりもした。お前らよりもずっと小さいガキが母ちゃんの名前呼びながら“喰われた”瞬間も見た」

ビドゥーは血が出ていてもまだ拳をさらに強く握る。

それは見ていてとても痛そうで、辛そうで、苦しそうで、悲しそうだった。

「残酷なまでに単純な摂理、弱い奴から死んでいくこの世界それが気にいらねえ」

ビドゥーは思いっきり地面を殴りつけた。

石畳の地面にヒビが入っていた、常人離れた力と拳の硬さだった。

「それ以上に自分の無力さが気にいらねえ!!」

今度は更に強い力でもう一度ビドゥーは地面を叩き付けた。

叩き付けた地面は地面に直径1メートルほどの大きな窪みを生み出した。

「なら、いい加減喰われてしまえばいいじゃない。諦めの悪い男だこと」

どこからか女性の声が聞こえてきた。

辺りを見回してみるがもうシオンたち三人以外は誰も見当たらない。

「シオン、上!」

リドルが声を上げる。指差した先には白い装束を身に纏った妙齡の女性が宙に浮いていた。

「まさか、あいつが・・・」

シオンが女性を睨みつける。

女性は不敵な笑みを浮かべてシオンたちを見下ろしていた。

「あらあら、また二人も上物が入ってきたわねえ」

「あいつが・・・夢魔、なのか？」

シオンがビドゥーに答えてもらうつもりで行ったのだが、ビドゥーは答えなかった。

「ふふふ、いいわ・・・その動揺、恐怖。あはははは」

女性が声を上げて笑い出す。

妙に耳に残って嫌な感じのする声だった。

「名乗っておこうかしら、私はアルプ。察しの通り・・・あなたたちが夢魔と呼ぶ存在よ」

アルプと名乗るその夢魔からはそれほど威圧感も感じなかった。

遠まわしに自分がビドゥーより遥かに強いと言っているのだが、シオンたちにはビドゥーの方がよっぽど強そうに見えた。

アルプという夢魔からは思ったほど魔力を感じない。

「そして私がその男の仲間をつ」

アルプがそう言いかけた瞬間、顔の半分が吹き飛んだ。

「か・・・あ、あ・・・」

次にアルプの腹部に拳大ほどの穴がぽっかりと開いた。

見ると先ほどまでシオンとリドルのすぐ近くに居たビドゥーが跳び上がってアルプの目の前に来ていた。

「うるせえ」

ビドゥーが握り締めた拳をアルプに繰り出す。

「がふっ」

ビドゥーの渾身の一撃でアルプはバラバラに吹き飛んだ。
赤い液体が雨のように辺りに降り注ぐ。

「す、すごいや」

リドルが驚嘆する。

「魔力を足に集中させて一気にジャンプ、そして今度は拳に集中させて一気に爆発させて・・・」

「とにかくすごいのは分かった」

少し興奮気味のリドルをシオンがなだめた。

ビドゥーが着地して溜息をついたあと二人に向かって言った。

「言つとくがこれで終わりじゃねえぞ」

「でも今のみたいなのがあと何体居ても敵じゃないよ、ビドゥーさん強いし。あれなら僕たちでも十分倒せる」

リドルがはしゃいでいるところにビドゥーがまた溜息をついた。

「ひどいわあ、いきなり殴るなんて」

地面から声がした。正確には赤い液体から、だった。

「また“一人分”死んじゃったじゃないのお・・・」

赤い液体の雫が中に浮かび上がり、どんどんくっついていって大きくなっていく。

「これであなたに殺されたのは・・・何人分になるのかしら」
次第にそれは人の形になっていき・・・

「でも大丈夫よ、まだまだたくさんあるもの」

ビドゥーに吹き飛ばされたはずのアルプの身体が元通りになっていた。

「再生能力・・・？」

リドルが言った。

「少し」

アルプがリドルの方を向いた。

その目を見てリドルは背筋がゾクツと震えた。

「少し違うわ、ぼーや」

ふふふとアルプは笑いながら宙に浮かび、クルクルと回る。

「さっきのあたしは死んだわ。今の私は新しい私」

アルプの言っていることをリドルは理解できなかった。

「いいこと教えてやるよ、俺たちの敵の数は・・・たったの一人だ」

「それって・・・」

シオンが言いかけたが黙っておいた。もし間違った仮定だとしたら・・・

「だが奴は喰った人間と同じ数だけ命を持っている」

どうやらシオンの推測は合っているようだった。

最悪だった。

喰った人間の数だけ命があるなら、恐らく百回や二百回殺したところであの夢魔は完全には死なない。

たった三人でどうにかなる相手ではなかった。

「あと、3926人」

微笑みながら、アルプはそう言った。

「ち、また増えてやがる。昨日でめえと会ったときはその半分も無かったじゃねえか」

ビドゥーが拳に魔力を込める。

「ふふふ、明日にはまた倍くらいになるわよお」

2 - 4 「アルプ、白き夢魔」(後書き)

アルプ「夢魔ってちょっといやらしいイメージがあるけど、この世界では違うのよ」

リドル「いやらしいってどんな？」

アルプ「貴方・・・天然なの、それとも・・・腹黒」

リドルはエア　ガを唱えた！！

アルプ「ああっ！！」

2・5「能力、条件、戦闘開始」（前書き）

、を×にすると某アニメのタイトルっぽくなってしまつのは偶然で
しょう、きっと

2・5「能力、条件、戦闘開始」

「ちんたらやつても仕方ねえ」

そう言つてビドゥーは魔力を込めた方の手でアルプを指差した。

「お前を千発ぶん殴る」

そう言つてもう片方の手で手招きしてアルプを挑発した。

「あら、挑発してるの。面白いわあ」

アルプが少し近づいてきた。

「私の能力・・・知つていて接近戦だなんて、馬鹿なのかしら、それとも・・・」

いきなり加速してビドゥーの目の前に飛んできた。

「何か策でも？」

アルプがビドゥーに向かって両手を伸ばす。

「殴るだけさ」

何故かビドゥーはその場から一步も動かず、身体を反らしすことでアルプの手を自分に触れさせないように避ける。

「ただしっ」

拳をアルプに繰り出す。アルプは多少のダメージは覚悟していたので気にせずビドゥー身体を触ろうとする。

ドスッ

拳がアルプの腹部にめり込む。

「がふっ」

アルプは苦しみながらもビドゥーに向かっていく。

（これは痛い・・・けど、まだ命はたくさんある。10人分くらい

使ってもコイツを喰う！)

そう考えていると、腹部の痛みがどんどん激しくなってきた。まるで何度も同じ場所を連続で殴られたかのように。

「あ、あがつー！」

痛みはどんどん激しくなっていき、アルプは耐え切れずにその場に倒れこむ。

「あがががががが！」

痛みは全く止む気配を見せず、どんどん強くなっていく。

「千発、だ」

「は・・・はがつ、あ・・・あつー！！！」

常人なら最初の一発目でとくに弾け飛んでしまう威力のビドゥーの拳を腹に受けて、アルプはしばらくもだえ苦しんでいた。

喰った人間の数だけ命があるアルプは、腹が吹き飛んでもすぐに再生する。

だがまたすぐに腹が吹き飛ぶ、再生する。それを何度も繰り返していた。

ほんの数秒の出来事だった。

「す・・・すごい、」

リドルとシオンが驚嘆した。

「何が起きたんだよ・・・一体」

「だから言っただろ、千発殴ったんだって」

ビドゥーが殴ったほうの手を押さえながら言った。

「ち、意外に硬いな・・・アイツ」

その手は出血で真っ赤になっていた。

「でも殴ったのは一発で、それにその怪我っ！」

リドルが慌てて持っていた鞆から消毒液と包帯を取り出して手当て

をしようとしたが、ビドゥーが手を突き出して無言で「今はいい」と伝える。

「それが・・・“魔術”か」

シオンが言った。

「おう、シオンでめえやつぱり賢いな」

ビドゥーは最初に会った時と同じような口調になっていた。だが、顔は笑っていないし、冷や汗が出ている。

「俺の能力は“千手^{ノック}観音”。相手を一度殴っただけで千発分のダメージを与える術だ」

発動条件は対象に向かって「お前を千発殴る」と言うこと。

そして言ったあとはその場から一歩も動かないこと。

条件は厳しいが、一発で石畳に小さなクレーターを作るほどの威力なので、喰らったら確実に・・・

死ぬ

「だがきつちり千発殴った分の反動をこっちも受けちまうのが痛いんだな、ったく」

ビドゥーがそう言って、シオンとリドルを手招きした。

「なんですか？」

ビドゥーは二人に手を上げるように指示した。二人は言うとおりにする。

パン、パン

するとビドゥーは何故か二人とハイタッチを交わした。

何の意味があつてやったか分からないでいる二人にビドゥーは説明する。

「俺のもう一つの能力“選手交代^{シフト}”だ。これを駆使して奴を倒す」

ハイタッチを交わした相手となら瞬時に位置を入れ替えることのできる能力。

対象とハイタッチをしてから三十分以内、目視できるか半径100メートルに対象が居ることが発動条件。

能力名を叫んだあと、対象の名を言うことで発動できる。

「いいか、もうアイツに“ノック”は当てられねえ。だがアイツを倒すにはこれじゃなきゃ無理だ。並みの攻撃じゃ奴を殺しきる前にこっちが消される。・・・だからお前たちはアイツに触られないようにしてギリギリまで近づけ」

そして、“シフト”で一気に間合いを詰めて“ノック”を放つという作戦だった。

「最低三回は奴に当てる必要がある。だが気をつけろ、奴の手には絶対に触れるな」

リドルが聞く。

「なぜ？」

「昨日奴と戦ったときに分かったことだ」

ビドゥーは説明した。

アルプの能力は“夢喰^{バク}”

相手の夢の中に入り込み悪夢を見せながら命と魂を削る能力。魔力を操れるものには抵抗力があり、ほとんど効かない。

もう一つの能力は“魂喰^{ソウル・バク}”

直接両手で触れた相手の魂を一気に喰らう能力。

抵抗の無いものは一瞬で、あるものは数秒で溶かされて吸収される。

「アイツ余裕かましてペラペラと喋っていきやがった。それでも勝つ自信があっただらうな」

「この夢の中みたいな空間はアイツの能力とは別なのか？」

シオンが聞いた。ビドゥーが頷く。

「別の奴の能力だろうな。敵か味方か・・・とにかくその事は後だ」

「アイツに触われずに、アイツに近づく・・・」

リドルが言った。何か考えているようだった。

「お・・・しゃべりは、もう・・・終わった？」

アルプがよろよろと立ち上がったくる。

「私が千人も死んだわ、こんなの初めてよ。屈辱」

アルプが三人を睨みつける。

睨まれただけなのにものすごい威圧感を感じる。

夢魔が本気で怒りをあらわにした瞬間だった。魔力があふれ出し、周りの地面や建物の壁がビキビキとひび割れていく。

「お前を、千発殴る」

ビドゥーがアルプを指差して言った。

「どうぞ、できるものなら」

アルプは笑っていなかった。

だが、絶対に当たらないという自信に満ち溢れているように見えた。
(・・・頼んだぜ、ガキども)

「あなたは後にして、まずあの子達から頂くことにするわあ」

アルプがシオンたちの方に飛んでいく。

「来た、やっぱり俺たちが先か・・・リドル！」

「大丈夫、僕がやる。援護お願い！」

リドルはそう言って鞆から魔道書を取り出した。

シオンも上着の裏側に隠してある投げナイフを数本取り出して構える。

「まだ魔術は使えないけど、僕には“風”がある。シオンもいる！」

2・5「能力、条件、戦闘開始」（後書き）

リドル 「ちなみに空を自由に飛べます、魔法で」

シオン 「魔力で無理やり脚力を強化すれば、空中でジャンプと
かできます」

アルプ 「素で飛んでいます」

ビドゥー 「垂直跳びで10メートルは軽くいけるぜ、おう」

（・・） 「聞かないで下さい」

2 - 6 「穏やかな風と共に」 (前書き)

戦闘って描写が難しい、下手ですいません

2 - 6 「穏やかな風と共に」

「・・・っ」

向かってくるアルプにシオンがナイフを投げつける。

「そんなもの・・・っ！」

ナイフに通った僅かな魔力を感じたアルプは瞬時にそれをかわした。

「ふうん、やるじゃない」

ナイフは直接当たってはいないが、ナイフを覆っていた魔力の刃がアルプの頬をかすめていた。

アルプがリドルから目を離してシオンを警戒している間に、リドルは呪文を唱える

「風の都に吹き荒ぶ、旋風纏う我、風神」

緑色の風がリドルの周囲を包み込み、羽衣の様な形になった。

「エアリアル空創空操、行くよ」

リドルが手で空気を払った。同時に突風が巻き起こりアルプに襲い掛かる。

「くっ・・・！」

アルプはリドルの周りに漂っている羽衣を見て、リドルが何か魔法を使ったと推測した。

（恐らくあっちの子は風使い。そしてあの羽衣は風を操るための魔力の結晶体・・・！）

アルプが手からいくつもの魔力の塊を弾丸のようにリドルに向けて放った。

するとリドルのまわりの羽衣が形を変えてリドルの盾になって、弾丸を防いだ。

（なるほど・・・形状変化もできるのね、状況によってはあれで直接攻撃することもできるってことね）

「だったらいいわ、先に・・・」

アルプは飛んできたナイフを難なく避けた

「こっちの坊やを先にいただくから!!」

アルプはシオンの方に向かってきた。シオンは身構える。

アルプがシオンの目の前に両手を突き出してきた。

それをシオンはギリギリで避け、アルプの後ろを取る。

「もらった!」

「後ろを取ったくらいでいい気に・・・!」

ただ一人戦闘に参加せず状況を冷静に見ていたビドゥーが動き出す。

「^{シフト}選手交代、シオン!」

アルプが振り向いた瞬間そこにシオンは居なくて、代わりに拳を繰り出してくるビドゥーが居た

「もう千発、喰らっていきな」

ビドゥーの拳がアルプにめり込む。

「が・・・ああああああ!!!!」

もだえ苦しむアルプにビドゥーは指を差しながら

「お前を千発殴る」

そう言った直後アルプに再び拳を繰り出す

「・・・くっ」

だがアルプが反応してパンチをかわす方が一瞬早かった。

「よくもおおおおお！！！！！！」

アルプがビドゥーに向かって両手を突き出す。

既に二千人の命を削り取られているアルプはかなり逆上していた。

（くくく、命が多い分ダメージを省みないところが仇になったな。
今更焦っても遅いんだよ）

ビドゥーはアルプの片手だけかわして、もう片方の手にハイタッチをした。

「・・・！！？」

アルプはビドゥーの行動の意味が理解できなかった

（何こいつ・・・自分からやられにきた・・・？）

ハイタッチをしたことによってビドゥーには隙が出来ていた

（でもこれは・・・好機！）

アルプはビドゥーに向かってもう片方の手を再び伸ばす。

「シフト」

「シオン！」

ビドゥーとシオンの位置が入れ替わった。

（・・・な！？）

突然のことに驚くアルプをよそに、入れ替わったシオンはアルプの手を避けて剣で一撃を与える。

「ぐうっ！」

悶えながらもアルプはシオンに手を伸ばす、だがそれを全てシオンは避けた。

（馬鹿な・・・何なのこの動き、人間ではありえない！）

シオンは再びアルプを斬りつけた

「があっ！」

アルプはシオンの背中に羽衣が羽のように形を変えてくっついて付いていることに気が付いた

（身体強化・・・いえ、羽のような形状からすると恐らく移動を補助するだけのものね。ここまで対応力のある魔法を扱うなんて・・・）

だがアルプの疑念はそれだけではなかった。

（たとえ移動速度が上がっても私の手の動きを見切ってかわすなんて常人には到底不可能！・・・動体視力、反射神経が優れているというレベルの問題ではないわ、これも魔法ね）

「甘く見ていたわ」

アルプは中に浮かび上がって3人に向けて言った。

（・・・ちい、落ち着きを取り戻しやがった。できればもう一発当てておきたかったんだが）

ビドゥーは舌打ちをした。

残りは最低でもあと2発、だがアルプの不意を突かなければ“千手観音”を当てることはできない。

だがビドゥーはもう一つ警戒していることがあった。

（あの二人の坊やのやり取りから小さいほうを黒髪の方がサポートするのだと思っただけ・・・逆だった、あの驚異的な身体能力で私の攻撃をかわしつつ接近。避けきれないのは小さいほうがサポート・・・）

アルプの身体から魔力があふれ出してきた

（ということはひとまずあっちの男は無視しても大丈夫、残った二人のうちのどちらか一人を攻略すれば私の勝ち・・・！）

「やはりか・・・“命”を削って魔力を上げてやがる」

アルプは残った命を数百人分ほど使って自らの魔力を爆発的に上げていた

「さしずめ命の濃度を上げているってところか・・・」

（だがこれは好機でもある、これで奴を一度でも殺せば残りはあと僅かのはず・・・）

（俺もあと一発分で限界・・・持久戦は不利・・・！）

ビドゥーの腕も限界が近づいていた

皮膚は全て擦りむけて腕は血で真っ赤に染まっていた

「これ以上無駄に死ぬわけにはいかないの、私には成さねばならないことがあるから」

アルプの身体から溢れ出る膨大な魔力の影響で近くの建物がどろりと溶けていく

（あの目に見えるまでに高濃度の魔力・・・あれに触れても常人なら即死だろうな）

「そうかい、俺も同じさ。俺にも成さねばならないことがあるんでね」

殆ど感覚のなくなってきた腕に力を込めようとしながら、アルプを指差す

「お前を千発殴る」

2 - 6 「穏やかな風と共に」 (後書き)

リドル 「あっはっは、エア ガ、エ ログー……!!」

シオン 「刀流 + 乱れ ち」

ビドゥー 「ため !!」

アルプ 「ドレ ンタツチ」

2・7「戦闘中、思考中」(前書き)

各頁の前書きと後書きは、あんまり見ないほうがいいかもです

2 - 7 「戦闘中、思考中」

「もうあなたたちの戦闘パターンは把握したわ、だからもうおしまい」

言った瞬間視界からアルプが消える。

「・・・リドルッ!!」

シオンが叫ぶ。

アルプが一瞬のうちにリドルの背後に回っていた。

シオンの声を聞いた瞬間リドルは羽衣で鎧を作り自身を包んだ。

アルプがリドルに触れようと両手を伸ばすが鎧に阻まれる。

「・・・く・・・うっ・・・」

鎧が風を巻き起こしてアルプを押し返そうとするが、それでもアルプの手はリドルに近づいてくる。

「ぐっ!!」

声を上げたのはアルプの方だった。

アルプの腕にはナイフが刺さっていた。

「リドル退がれっ!!」

シオンが叫ぶとリドルは後ろに飛んで退いた。

「でえええいっ!!」

シオンが思い切り斬りかかるが、避けられる

「ガキiiiiiiiiiiii!!」

アルプがシオンに手を伸ばす。しかし伸ばした手がシオンに触れる瞬間弾かれた。

（また風か・・・っ）

「ちい・・・っ」

アルプは舌打ちをしながら風を振り払う。

（まずいな・・・）

タイミングを計っていたビドゥーは二人がアルプの背後をとったらすぐに“選手交代”をして攻撃を仕掛けるつもりだった。

（夢魔の動きが予想以上だ・・・あれだけ素早く動かれちゃいくら二人がかりでも後ろを取るのは無理だ・・・それに）

ビドゥーは全く動かなくなつた自分の片腕を見た

（もう駄目だな・・・この腕、死んでやがる）

さつきから動かそうとしても激痛が走るだけで腕は殆ど動かない。

血が乾いてそれ以上の出血は止まったが、はつきりいつてもう動きの邪魔にしかならなかった。

（“千手観音”はこっちの腕でしか使えねえ・・・そういう条件の能力だ）

無いほうが体が軽くなるのでいつそ引き千切つてしまおうかともビドゥーは思ったが、まだ使い道があることに気付く。

（まだ牽制程度にはなるか・・・だが二度目はねえな、感づかれる）

ビドゥーの腕が使えないことはビドゥーしか知らない。

それを利用してシオンカリドルと“選手交代”して突然アルプの目の前に出れば、当然アルプは“千手観音”を警戒して一瞬動きが止まる。

止まらないにしてもほんの僅かな時間、コンマ数秒でも動きが止まればシオンがアルプに攻撃を当てられる。

（なぜ魔力で身を固めた夢魔に傷を付けられるのかは置いて、あいつの斬撃をまともにくらえばこの押されている状況から一気に逆転だ）

勝負の鍵はアルプがビドゥーにどれだけ警戒をしているかという所だった。

戦闘には参加せず傍観している状態のビドゥーに攻撃を仕掛けない理由はいくつか考えられる。

一つはただ単に後回しなのか、これは良くないパターンである。もしアルプに三人同時に相手をする余裕があるのなら奇襲を仕掛けても対応される恐れがある。

もう一つはシオンとリドルの相手で手一杯なのか、これは最悪のパターンである。アルプに“勝てない”と判断されたらまず間違いなくアルプは逃げる行動をとる。そうされたらまだ残っている人間を根こそぎ吸収してさらに魔力を強化して再びこちらに向かってくるだろう。この国の人間を全て犠牲にするうえこちらも吸収されてしまうことは完全な負けに等しい。

そしてビドゥーが想定している“アルプがビドゥーを警戒しつつ、シオンたち二人とはやや優勢気味に戦っている”状況が最良のパターンだった。

その場合アルプは“あの男の攻撃を喰らいさえしなければいい”と思っているだろう。そうするとシオンたちには積極的に近づこうとするが、ビドゥーとは何かあっても対応できる距離を保とうとする。仮説が正しければアルプがもっとも神経を使っているのは、“選手交代”でビドゥーが出てきた時に即座に対応できるようにするということだ。

たとえ多少のダメージを喰らおうともビドゥーの“千手観音”だけには当たらないようにする。

アルプがビドゥーを恐れれば恐れるほどこのフェイントの成功率は増す。

（きつい賭けだがやるしかねえ・・・成功か、死か・・・だ）

「はっ、やるじゃない。魔力で覆った私の身体に傷をつけるなんて」
アルプはシオンに向かって叫びながら考える。

（でも考えられない・・・物理的な硬さで言えば鉄よりも硬くなつた私の身体に、僅かな魔力しか通ってない投げナイフなんかで傷をつけるなんて・・・）

アルプはビドゥーとリドルの能力は把握したつもりだが、シオンの能力はまだ基本的な魔力による物質や肉体の強化しか見ていない。
（魔法も魔術も扱えないという可能性もあるけど・・・いえ、もしかしたら・・・）

アルプの仮説は正しかった。シオンは既に能力を使っていた。
相手の魔力を切り裂く魔法、シオンが唯一使える魔法だった。
シオンはこの世界では非常に珍しい“無”の魔法を扱う人間だった。
（因みにリドルは“空”、ビドゥーは“時”と“空”の魔法を現時点で使用している）

“無”の魔法は他の全ての魔法とは隔絶された存在。

他の全ての魔法を消し去る特殊な魔法。

“無”の魔法を扱う者に対し、魔法使いたちは完全に無力となる。

この場合はシオンの魔法は不完全なので剣やナイフを媒介にしないと発動しないようだが、相手の魔力がどれほど強大でも“無”でそれを切り裂いて無防備な相手に直接ダメージを与える・・・この状況でアルプを攻略する唯一の手段だった。

2・8「夢は醒めるもの」

「さあ、そろそろ終わりにしましょう・・・」
どちらが倒れるにしても、もう次の一手で全てが決まる

「死ぬ前に教えてあげようかしら、この国のこと。気になるでしょう・・・この国に入ってから感じる違和感、その正体が」
穏やかな笑みを浮べてアルプが語りかけてくる。

「この国は王の見る夢、王が見る夢を具現化した世界なの」

「・・・？」

三人ともいつていることをよく理解できないで居る。

「この国の王の能力は“夢可遊興”^{ユートピア}、夢で見たものをそのまま現実へと具現化する力」

「なるほど、とするとこの国の中は王の夢の中に等しいって訳か。
どおりで夢魔であるお前が存在していられるわけだ」
ビドゥーが言うとアルプは笑顔で肯定を示す。

「王は現実に失望し、疲れていた。せめて夢の中では自分が王となり理想とする世界を求めた」

アルプはまるで思い出を語るように三人に話す。

「でもその王の望みも叶わなかった。この夢の国にも様々な欲望を持った人間がやってきた」

三人は警戒をしつつもアルプの話聞いていた。

「王は絶望した、夢の中にすらも自分の求めるものが無いのだからだから……」

そこでアルプは言葉を濁した。

「いえ、今更話しても変わらないこと」
右手に魔力を集中させる。

「ああ、そうだな。お前さんが何を考えているか、何をしたいか、それは俺たちには関係の無いことだ」
ビドゥーが言い放った。

「そうよね、あなたは私が嫌い、憎くて仕方が無い……殺しても足りないくらい嫌い」

「そんなんじゃないよ」

しばらくの間静寂がその場を包み込む。
アルプもビドゥーも何かを悟ったような顔をしていた。

「さて、そろそろか」
ビドゥーがそう言っただけでアルプの方ではなくリドルの方を見た。
「……？」

アルプは訝しげにその様子を見る。そしてあることに気付く。

「……ああ、油断したわ」

アルプは身体を動かそうとしたが、全く動かなかった。

「何かしら・・・金縛りでもないし、やはり・・・大気の壁？」

「まあそんなとこ、大気を圧縮して両手両足を固定したからまず動けないよ」

少し長い時間をかけてリドルが発動した大気圧縮の魔法“セフィードロック 空気結塊”がアルプの動きを封じていた。

「・・・ああ、あつけないものね。これで私は負けたのね」
それにしてもアルプは全く悔しそうな素振りを見せない。

「さて、俺はお前が降参しようがしまいがお前をぶち殺したいんだが」

ビドゥーが拳を構える。神経もボロボロになっていいるなか、僅かに残っている感覚を頼りに身体を動かす。

「そうね、私が降参しようがしまいがあなたの腕も、身体ももう・・・」

アルプはビドゥーの腕が既に使い物にならないことに気付いていた。気付いていた上でわざと知らないような振りをしていたのだった。

「お前さんも相当来てるな、分かっててなぜ・・・」

「あら、あなたと同じような理由よ」

シオンとリドルは黙って二人を見ていた。

何となくだが手を出してはいけないような気がした。

「お前を千発・・・ぶん殴る」

腕はとうに限界を過ぎていた。
気力の問題だった。

「最期に言う事は」

ビドゥーが夢魔に尋ねる。

「そうね・・・」

夢魔はゆっくりと口を開く

あなたは人間、私は夢魔・・・だけど

「愛してる」

2・9「愛しい夢、貴方の夢」

「憎いとか憎くないとか・・・そんなんじゃないよ、今更・・・」

ビドゥーは語りかける

「あのときお前から二人を庇い切れないと俺は判断した、それは良かったんだ・・・それは」

蹲っているアルプに語りかける

その肉体は腹のあたりから下が吹き飛んで無くなっていた

「どちらを庇うか・・・そんな選択肢しか出せねえ俺が・・・」

ビドゥーは語りかける

「許せねえ・・・」

夢魔に語りかける

「俺が身代わりになっても・・・二人を逃がしていれば・・・」

既に死に尽くしてしまった夢魔の亡骸に向かい

「許せねえよ・・・自分が・・・」

語りかける

そしてその直後に口から血を吐いて倒れる

ビドゥーの周りに真っ赤な水たまりができる

すでに動かなくなった夢魔と、もうじき動かなくなる人間の身体が生温い真っ赤な、鉄錆の匂いのする液体に浸される

「ビドゥーさん・・・」

リドルが悲しそうな目で倒れた二人を見つめている

「死にたがっているようにしか見えなかったな・・・二人とも。自分が許せない、だから自らに与えられる罰を・・・報いを求めている」

「大切な人を失う悲しさ、苦しさ、辛さ、寂しさ・・・そして自分を許せないというやり場の無い怒り、そしてその後に生まれてくる虚無感・・・」

「もう俺たちに知る術は無いけれど、ビドゥーさんと・・・この夢魔にとつてそれを失うということは精神的な“己の死”を意味していたんだよ、きつと」

「この国の王様だっけ・・・夢魔も人間に恋をするのかな」

「人間には理解できない次元なのかもなあ・・・」

「きつと王様の夢も・・・もうすぐ終わるんだよ・・・」

「魂が抜けて虚ろになった肉体は、腐り朽ちて土に還る・・・」

「死んでしまつたらその人には何も残らない・・・たとえ墓ができて、残された家族がいたとしても・・・死んだ人には、もう何も残らない・・・」

「悲しいね」

そして夢が醒めて、全てが溶けて地に還った

残されていたのはシオンとリドルの二人だけだった

「すっかり夜だな、これじゃあ野宿だ」

シオンが言つとリドルが大げさに反応して

「なっ！！今日こそはふかふかもふもふなベッドで寝れると思ったのに・・・話が違つよ！！」

「何の話だ」

結局夢の国が消え去つて何も無いただの荒野で野営をすることにした

「あのさ、シオン」

「ん」

火が小さくなつた焚き火が生み出す幻想的な明かりと、静寂の中間こえてくるパチパチという薪が燃える音に二人の会話が加わる

「誰かを殺したり、苦しめたりする力は要らないって今まで思っていたけど・・・やっぱり、力が無いと守ることもできないんだよね」
「・・・」

無言で答えるシオン。構わずリドルは話し続ける

「ビドゥーさんもきつところ思つてたよ、二人を守りきつて自分も

生き残る・・・その選択肢を選ぶことができるほどの力があつたら・・・って」

「・・・でも、お前は人を傷つけるのが嫌なんだろう？」
シオンが質問をすると少しリドルは俯いたが

「・・・次は、僕もちゃんと闘うよ。大切な人を、自分の命を、意志を、失いたくないものを失わないようにするために・・・使えるものは全て使う。できることは全てする」

(・・・そして必要なら、僕は)

「・・・なら俺ももつと強くなる。結局あの人に助けられたから・・・あの人が今度は自分が身代わりになるという選択肢を選んだから・・・」

だから、もつと強くなる

誰一人として涙を流すことの無い、そんな幸せな世界でいてほしいから

不可能なのは分かっている、でも認めたくない

認めたら、また俺は弱いまま何も出来ずにいそうだから

「さて、いい加減もう寝るぞ。明日は夜明けごろに出発だ」
「うへえ・・・せめてあと5時間くらい、お昼出発にしない？」
「譲歩のしようが全く無いんだが。それにしたらまた一日ふかふかもふもふベッドが遠くなるぞ（そんな高級なところには絶対に泊まらないが）」

「ぜ、善処します」

そんな言葉を言う奴が本当に善処した試しが無い

「嗚呼・・・せめていい夢でありますように」
「お前の夢って・・・さぞ混沌としているんだろうな」
「なんですと！」
「いや、だって・・・」
「!!!」
「・・・・・・・・」

そんな他愛の無いことを喋るうちに二人はまどろみの中へと沈んでいった
そして夢を見て、目が覚めたらまた旅をする

そしてまた夜がきて、夢を見て・・・

夢が醒めたら、また旅をする

夢はいつか醒めるもの

命はいつか果てるもの

だったらせめて、その僅かな間だけでも

いつか終わりが来るその瞬間までは

優しく包まれていたい

3 - 1 「出会いと想いの中で、私は」

私はとある理由があつて世界中を旅している。

私の名前、そして旅の理由はここには記さないでおく。

どちらも聞いたところで、これを読んでいる諸君の知的好奇心に応えるだけの面白い内容ではないからだ。

だが私にとっては私の名前と旅の理由は、今の旅人である私を構成する大きな部分であつた。

前置きはさておき、本日とある国のとある町で二人の旅人に出会つた。

彼らの名前は伏せておこう。許可も無く他人の情報を載せるのは、その情報の確度に関わらずあまり褒められた行為ではない

と、私は思う

その二人はまだ年端も行かぬ少年で、一人は十代半ばでもう一人はそれより少し下・・・といったところだつた

その年で旅をするということは余程の理由があるのだらう。まさかこの御時世にどこぞの金持ちの道楽、と言つわけでもあるまい

兄弟にも見えたが、互いの会話や目や髪の毛の色の違いなどからどうやらそうではないと思われた。

両親など家族は全ていないのだらう。容易に推測できる。

旅の理由も恐らくそれが関係しているのだろう

と、私は思う

だから私は彼らに旅の理由を聞くつもりは無い。私は聞かれたら応えるつもりだったが。

彼らも私に気を遣っているのだろう。そういった話題には触れなかった。

始めは互いに警戒をし合っていた。旅をする上で自分以外は全て敵と仮定して行動するのが一番安全だ。疑心暗鬼は目に見えない敵を生む代わりに生存確率を大きく上げる。

だが小さいほうの少年のあっけらかんとした態度と発言、行動にすっかり私も（恐らく相方の大きいほうの少年も）毒気を抜かれてしまい、そこからはすっかり打ち解けてしまった。

その小さな少年は常に明るくは振舞っていたが、時々遠くを見るような、何だか今にも消えてしまいそうな悲しげな表情を見せた。

そのときの目は、薄く曇っていた。

私はこの少年の今まで経験してきた苦悩の欠片を垣間見た気がした。まだあんなに幼い、あまりにも幼い少年がどれほどの苦痛を味わってきたのか

それは私には想像しえないほどのものなのだろう

と、私は思う

だが、きつともう一人のあの少年・・・

彼がきつとこの少年の何かを変えたのだろう

彼と話すときの少年は生き生きとしているように私には見えた

持ちつ持たれつだな・・・

と、私は思う

翌日、彼らは旅立った。

別れは必然のことだとは思っていても、やはり名残惜しかった。

私は「君たちの旅に、光がありますように」なんて気取ったことを
言って別れを告げた。

彼らは嬉しそうににこりと笑って歩き出した。

話を聞くと、どうやら彼らが次に向かうのは水の都として名高い「
ヴェルネ」へ向かうらしい。定期船に乗って隣の大陸に渡るつもり
だろう。

私は噂の「夢の国」に行こうと思い、そのことを彼らに話したらなんと気まずそうな顔をして「その国はもう無くなりました」と言った

まさか内乱でも起きて滅んだのだろうか・・・「夢の国」が？
彼らは喋りたくない様子だったので聞かないことにしたが・・・やはり気になる

どちらにせよ通る道なので、確かめに行くことにした。
急ぐ旅でもない、気ままに行こうと思う

と、私は思う

「魔法使いというものをこの目で見る」

それが私の旅の目的の一つだ、理由は言わないがそのために私は旅をしている

しかしいったいどこにいるのだろう・・・

存在するというのはどうやら確からしいのだが・・・

だが居るとしたらその人物は・・・
きつとももの凄い年をとった老人に違いない

と、私は思う

4 - 1 「Black room」

どうしてかしら

この世界はどうして私たちに冷たいのかしら

私たちはただ・・・

人として生きていたい

それだけなのに・・・

神様はそれすらも許してくださらないと言うの？
私たちに人として・・・

この世に生きる資格など無いと仰るの？

ねえ、答えて・・・

私たちを助けて・・・

この血生臭くて、薄暗くい部屋から私たちを連れ出して・・・

私たちを救い出して・・・

・・・もう、狂ってしまいそう

死にたい．．．でも、死ねない．．．

「姉さま．．．」

守らなきや．．．

「姉さま．．．」

私が．．．守らなきや．．．

「姉さま．．．」

守らなきや 守らなきや 守らなきや 守らなきや 守らなきや 守らなきや
守らなきや 守らなきや 守らなきや 守らなきや 守らなきや 守らなきや
守らなきや 守らなきや 守らなきや 守らなきや 守らなきや 守らなきや

．．．．．

たとえ心が壊れても、この子だけは守らなきゃ・・・いけない

「大丈夫よ、私はここにいる」

そのためだったら、どんな犠牲を払っても構わない・・・

世界が私たちをごみのように扱うのなら、私たちも他の人間をごみのように扱えばいい

痛みは痛みでしか返せない
いまさら優しさなどで癒える事は無い・・・

それだけの、深い傷

決して消えない傷が私たちを少しずつ壊していく・・・

でもその前に、私たちは壊していく

私たちを助けてくれなかった神の作った・・・
こんな薄汚い欲望の塊でしかない人間が・・・
まるでコケのように湧いて溢れかえっている腐りかけた世界を・・・

「さあ・・・もう寝ましよう、そして明日はたくさん遊びしようね・・・」

壊せるだけ壊していく

4 - 2 「得意不得意」 (前書き)

教えてリドル先生、第二段開幕

4 - 2 「得意不得意」

「すごいよシオン、街中水路だらけだよ、ほらほら」
「そんなにはしゃぐようなことか・・・？」

シオンとリドルは水の都と呼ばれる街に来ていた。

さすが水の都と言うだけあって、いたるところに水路が張り巡らされている。

わざわざ井戸にまで水を汲みに行かなくていいので、便利と言ったら便利だが、水路の向こう側に渡るためにわざわざ遠回りして橋を渡るか船に乗るかしないといけないので、不便と言ったら不便だ。

「うーん・・・」

「ん、どしたのシオン」

何故かはしゃいでいるリドルが浮かない顔のシオンに尋ねる。

「いや、最近ここで何かあったのかな・・・ってさ」

街に入るときに荷物のチェックが妙に念入りに行われたので、シオンは少し違和感を感じた。

ただ単に人の出入りに関して厳重なだけなのかもしれないが、それにしてはチェックをしている人間の手際が悪く、どこかぎこちない感じがした。

「何かここ最近から急に警備を強化したみたいな感じだったんだよな・・・」

「ということはさ、そうしなくちゃならないような理由があるわけだね」

シオンは首肯する。

「何か事件でも起きたか、それとも・・・」
そう言っただけでシオンはしばらく黙り込む。

自分としては早く街の中を見て回りたかったので、リドルが少し苛立つ。

「考えるのは後のしてさ、まずはこの街のすばらしさを堪能しようではないかシオン君」

「お、おい」

結局我慢できなくなったリドルがシオンの手を引っ張って水路に泊めてある小船の方に向かっていく。

「歩かないで街を回れる・・・なんて素晴らしい街なんだ！」

ああ、そういうことか。とシオンはリドルの相変わらずの怠慢さに溜息をつく。

リドルなら魔法で空を飛んだりして移動することも可能だが、それも結構な精神と集中力を消費するので（それに人前で魔法を使うのはあまり好ましくないため）、余程のことが無い限りは徒歩で今まで移動してきた。

「もっと燃費のいい移動用の魔法は無いものか・・・」

船主に渡し賃を渡してとりあえず街をぐるっと回ってもらうことにした。

「お前が使ってる移動用っていったら・・・あれか、背中に羽生やすやつ」

といってもそれはシオンが知っている中のものであって、もしかしたらリドルはシオンの知らない魔法を持っているかもしれない

「ああ・・・あれは何かというか・・・見た目に拘りすぎた、うん。」

イメージしやすいからすぐに出せるんだけど燃費が悪いんだよねえ・
・・」

基本的に魔法や魔術はイメージするだけで使えるもので、使用者がイメージしやすいほど精度や威力が増す。

魔法を使うものを便宜上魔法使いと呼んでいるが、実際は普通の人間と何も変わらない。

ただ、常人より精神力、集中力、想像力などが強いものである。

平たく言うと善悪問わず「心」が強いもののことで、後天的に魔法が使えるようになるのである。

だから魔法使いの中には過去に辛い経験をして精神的に強くなった者や、芸術的センスがすぐれた者が多い。

前者は「魔法」を、後者は「魔術」を得意とするケースが多い。

両方に一致するものは、魔法と魔術を両方得意とするので俗に「賢者」などと呼ばれている。

「火と風と水の魔法が巧く使えればもつと簡単に空を飛べるんだけどなあ・・・」

10段階で評価すると、リドルの魔法のレベルはおおよそ

火・・・3

水・・・5

風・・・8

である、ちなみにレベル1が「常人」、3が「該当属性の魔具が扱える」、5が「該当属性の魔法が扱える」、レベル8は「天才」の域である。

「姉さんなら・・・火の魔法が得意なんだろうなあ・・・性格上」

「お前の姉さんなんだからそりゃもうすごいんだろうな・・・」

シオンは笑顔で爆炎を撒き散らす小柄な少女を想像した。少し身震いがする。

「あ、絶対変な想像してる」

リドルが訝しげにシオンを見ている。

4 - 2 「得意不得意」 (後書き)

(. .)

・ ・ 感想とかくれたら嬉しいな、なんて ・ ・

いや、何でもないです。戯言でした、はい

4 - 3 「我が姉何処」(前書き)

リドルは日本語で「謎の人」といいます

4 - 3 「我が姉何処」

リドルの旅の目的の一つ、それは唯一の肉親である姉を探すことだった。

直接聞いたわけではないが、リドルが両親を亡くしたこと、それが姉と離れ離れになった理由の一つだということはシオンは察していた。

どういった経緯でそうなったかは聞くつもりはないし、聞きたいとも思わない。

軽々しく背負えるものでもないとしオンには分かっていた。

「姉さん、何所に居るのかなぁ・・・」

「心配か？」

リドルは首を横に振る。

「うんにゃ、姉さん僕よりずっと強いから大丈夫だって」

どう見ても心配しているという顔だった。

全くコイツはどんなに辛かろうと悲しかろうとそうやってへらへら笑って平気そうな風にする、シオンは思った。

それだけ強い精神を持ち合わせているのだろうが、いつか壊れてしまわないかと不安になる。

（あの時みたいなのは勘弁だからな・・・）

互いに何も言わないで数分ほど経とうとしていた。

何だか急にしおらしくなったリドルに声をかけづらくなり、何とも居づらい空気になる。

「・・・・・・・・・・」

何かに気付いたようにリドルの目が少し大きく開く。
シオンもその目線の先を追った、すると・・・

「「すいません、止めてください」」

同時に二人は船主に言い出した。

二人の目線の先には、道の上で倒れている子どもが居た。

「・・・・・・・・」

上等そうな服を着た少年だった。背丈はリドルと殆ど同じだったが、表情は幼い。

「何か勢いで船に寄せちゃったけど・・・君、名前は？」

リドルが少年に聞いた。すると少年は

「・・・姉さま」

見当はずれの解答をした。

「いや、僕は君の名前を・・・」

「姉さま・・・何所に居るの・・・姉さま・・・」

うわ言のように何度も少年はそう言った。

「あ・・・・・・・・だから、あの・・・・・・」

「・・・・・・・・頭でも、打ったか」

リドルがあたふたしているのを少し面白そうに見ながら、シオンがボソツとひとりごちる。

「じゃ、じゃあさ・・・“姉さま”の名前は？」

「・・・姉さまは、姉さまだよ？」

リドルはガクツと肩を落とした。

結局その少年も船に乗せたまま街を回ることにした（追加料金はリドルが負担）。もしその“姉さま”がこの少年を探しているのならば、この方が目に付きやすい。

「何もそこまでしなくてもいいのに・・・お前が自腹切ってまでなんて、珍しい」

「い、いいじゃんかつ、別にシオンに迷惑かけてないじゃん」

「まあ・・・」

そうだなと言ってシオンは頷いた。

「それに・・・」

「それに？」

「この子も自分のお姉さんを探してるんでしょ？・・・僕と、同じだ」

ああ、そうか・・・

シオンは何も言わずに、一緒に“姉さま”を探しだした。

「やっぱり家族って・・・大切なもんなのかねえ・・・」

「うーん・・・僕の場合は家族っていうより姉さんが・・・だったけど、やっぱりそうなんじゃな・・・」

言いかけてリドルは気付いた

「ごめん・・・」

「なんだよいきなり。さっきから元気がないぞお前」

「・・・姉さま」

複数の意味で“謎”の少年は、さっきからそればかりだ。

「人を探す魔法は無いものかね・・・」

シオンがぼやく

「あるにはあるけど・・・探す相手が誰だか分からないから使えないよ」

そういったあとリドルも

「せめて名前だけでも話してくれればその“姉さま”を探せるのになあ・・・」

ぼやく

「・・・ディナ」

そう言ったのはさっきまで「姉さま」の一点張りだった少年だった
「え、今なんて・・・」

リドルが聞きなおす

「・・・ディナ」

聞き間違いではなかった

「それがその・・・“姉さま”の名前？」

リドルが聞くと、セシルは首をコクコクと上下に振った。

「・・・じゃあ、君の名前は？」

「セシル」

「・・・なんで急に話してくれる気になったの？」

「話したら姉さまに会えるんでしょ？」

なるほどどうやらこのセシルという少年は自分にとって利がない場合は一切口を開かないらしい

「姉さまどこに居るの？」

セシルはじーっとリドルを見つめる

「あ、えーと・・・その・・・」

じーっとリドルを見つめる

「も、もうすぐ見つかるよ・・・たぶん」

じーーーーーっと見つめる

リドルは冷や汗をかいていた

（・・・こりゃ見つからなかったら大変だ、うん）

自分の姉より先に、他人の姉を探す羽目になるリドルであった

「・・・姉さま」

4 - 3 「我が姉何処」 (後書き)

リドル「謎が謎を呼び、憎しみがまた新たな憎しみを・・・！」
シオン「何言ってるんだ、お前」

4 - 4 「労働祭、影の都」(前書き)

誤字脱字などありましたら・・・
優しく受け流してください(・・・)
そう、右から左へと

4 - 4 「労働祭、影の都」

「ところであんた方、この街には観光にやってきたのかい？」

船主が尋ねる

「いいえ、僕たちは定期船に乗るために」

シオンがそう答えると、船主はそうかそうかと頷きながら

「じゃあ、この街で今日行われる祭りについては？」

シオンたちは首を横に振った

「そうかそうか、なら教えてあげよう。この街では毎年“労働祭”というものが行われるんだよ」

「何だかイヤーな名前・・・祭りなのに働かなくちゃいけないの？」
リドルは労働という単語が嫌いらしい。何とも将来が不安になる発言である

船主はぶつと吹き出したあと、大きな声で笑った

「あつはつは、逆だよ逆。名前で勘違いするかもしれないが、まあ・・・要するに普段汗水流して働いている者たちに対する労いの意味もあるんだ」

「むう・・・具体的にどんな内容なの？」

「主催しているお役所や貴族の人間が我々に食事なんかを振舞ういたって簡素なものだったんだがね、最初は。でもそのうち街の名物になるまでになって観光客も増えた。ありがたいことだよ、他の国には無いだろうな、うん」

船主は誇らしげにそう言った。

その様子をシオンはじっと見ていた

（濁ってる・・・）

リドルも何だかつまらなそうにしていた

「姉さま・・・」

船主の話にも全く興味を持たないセシルを見て、船主は

「きつとこの子も観光で来たんだろう。祭りはあと何時間かで始まるからそれまでに見つからなかったら会場に行けばいいさ」

気が付けばもうすぐ陽が落ちる時間である。

まだ宿をとっていないことに気付いたリドルが焦りだす

「このままじゃふかふかベッドがつ！」

シオンはそれはそれで構わないという感じだった。野宿すれば宿代が浮くからまあいいかという感じだった

「まあ、野宿でも俺は・・・」

「馬鹿っ、シオン馬鹿っ、そんなんじゃ旅の疲れは取れないよ、馬鹿馬鹿馬鹿っ」

休むことには全力で取り組むリドルはシオンの肩を掴んでブンブンと揺さ振った。

「それなら私が宿を紹介しよう、安いし食事が美味しいところだよ」
安上がりで済ますことに全力で取り組むシオンは、リドルの腕をパツと掴み

「じゃあそこで」

とだけ言った。

「ならすぐに行こう、私はその宿の店主とは知り合いだから顔が利く。もし満室でも予備の部屋があるからそこに泊めてくれるだろう」
「え、でも・・・まだ早くない？」

「遅いくらいだよ、今日はお祭りだからすぐに満室になっちまう。」

さあ行くよ」

まだ回っていないところがあるが、船主はすぐにでも宿にシオンたちを連れて行こうとした。

妙に焦っているというか、急かしているというか、どこか変な感じだった。

「姉さま」

セシルが建物と建物の中の細道の方を見て呟いた。

「・・・セシル、姉さまは悪いけどお祭りのときに」

「ちよつと待て、リドル」

シオンが何かに気付く。二人はセシルの視線の先に誰かが居る事に気付いた。

「探したわよセシル・・・心配したわよ、もう・・・」

その方向には、フリルのドレスを纏った金髪の少女が立っていた。まるで人形のような整った、無機質な笑顔の少女がこちらを見ていた。

「えーと、この子のお姉さんですか？」

リドルが一応確認のために聞いてみる。

だが二人はこんな人気の無い所で、弟を探すためとはいえ女の子が一人で歩き回るのは不自然だと感じた。

何よりこの静かな場所で今まで少女の足音が全く聞こえなかったのも妙だった。

「デイナといいます。弟のセシルがご迷惑をおかけして申し訳ございません。ありがとうございます」

優しく笑ってディナという少女は一礼をした。

「あ、いやいや別に一緒に船乗って回ってただけだし気にしないで下さい」

リドルがほぼ同年代の少女に対して軽い感じで会話をする中、リドルとシオンは二人を警戒していた。

特にセシルの方に

「姉さま、僕もう我慢できないよ」

今まで賊やら何やらと何度か命のやり取りをしてきた二人だが、その中で分かったことがいくつがある

魔力を操り、魔具や魔法、魔術を駆使して闘うシオンたちにとって、普通の人間が相手ならば目を瞑っていても無傷で、相手を倒すことは可能である

「そう・・・我慢してたのね、偉いわセシル」

「えへへー」

ただ、魔法使いも魔力を使わなければ普通の人間と殆ど変わらない。だから普通の人間と思って油断していたら急に魔法を使ってくると思わぬ痛手を被ることがある

区別することは容易ではない。だが、今までの闘いの中で二人は僅かな違いを感じ取る

「弟さんが見つかった良かつたな、ところで今晚の宿は？」

全く気付いていない船主がディナに話しかける

「まだなら私の知り合いがやっている宿を紹介しよう、さあ君も船

に乗りなさい」

セシルはじーっと船主を見つめる。

しかし船主はディナの方を向いていてそれに気付かない

ディナはくすつと笑って

「その宿屋はさぞ素晴らしいものなのでしょうね」

声が聞こえてきた。恐ろしく冷たくて妖しげな声だった。
僅かに周囲の空気が冷たくなるのを感じる

船主が一瞬驚いたようにしていたが、笑いながら答える

「ああ・・・とても素晴らしいよ、保証しよう」

船主はいまだに気付いていなかった

ディナの眼に浮かぶ負の感情

殺意

「リドル」

「大丈夫」

シオンとリドルはそのやり取りだけで互いの意思を伝えた。

「んー・・・」

セシルは相変わらず無表情のまま船主を見ている

「どうした、乗らないのか。船が苦手なのかい、なら場所を教えるから・・・」

「いいえ、場所は知ってるわ。一度一度行ったことがあるから・・・
奴隷として」

船主の表情が一瞬崩れる

「な、何のことかな」

「言葉の通りよ・・・一度私たちはあそこで売り飛ばされたのよ。
奴隷商人さん」

「奴隷・・・？」

リドルが訝しげに船主を見る。船主の顔からは汗が滲み出ていた
(奴隷か、なるほど・・・)

「何を言ってるんだ、あまりでたらめなことを言っていると・・・」

急に周囲の空気がサーッと音を立てながら白くなっていった

「な、何だこの霧はっ？」

船主だけが慌てふためいていた

船主はこの白い空気を霧と言ったが、実際には違っていた。

「ふふふ、そこのお二方」

姿は見えなくなったが、ディナがシオンたちに声をかけてきた

「良かったわね、その男についていたら身包み剥がされてどこかの貴族に奴隷として売り飛ばされていたわよ」

水面が凍りつくほど空気が冷たくなっていた。

白い空気はパリパリと音を立てている

「何だこれ・・・さ、寒い・・・」

船主一人だけが寒さに凍える。恐らくは何らかの魔法によるものだ

ろう。使っているのはおそらくディナ

「この街の忌まわしき過去って奴か・・・」
シオンが何か知っている風に言った

「あら、知っているの？」

相変わらず姿の見えない少女は少し残念そうに言う。

「いや、この人の話がどうにも腑に落ちなくて」

「それは僕も思った」

リドルが口を挟む。シオンはディナの方を見た

「どうぞ」

そう言われてシオンは話し出す

「労働祭つてのも結局のところ過去に奴隷だった人間たちにしてきたことに対する償いのつもりなんだろうなって思っていたよ。償われるべき人間はどうせ殆ど死んだんだろうがな」

「いい読みよ、でも少し違う」

船主が一人だけ凍えそうな表情をしている中、シオンとリドル、そしてセシルと（姿は見えないが恐らく）ディナは平気そうだった

「は・・・は、は・・・寒い・・・はひ・・・」

既に船主の身体は蒼白くなっているが、誰一人として気にかけることは無かった

セシルは全くその場から動かず、固まったようにしている

「そうか、自信あったんだけどな」

「は・・・はふ、かはっ・・・」

船主の身体の表面に霜が降りてきて、顔や手の皮はひび割れて血が

滲んできた

「ひ・・・ひぬ、はふけへくへ・・・」

船主が何と言ったかは分かったが、誰も船主を助けなかった

ぶしゅっ

身体のところどころから血が吹き出したが、一瞬でそれも凍りついた。

まるで真っ赤な無数の針が身体中に刺さっているかのような状態で、船主が呻き声を上げる

「だの・む・助けでっ・・・ぐれっ・・・かはっ」

必死で助けを求める船主。

「ああ、もう喋らなくていいわ貴方・・・口を閉じなさい」

「ぞんな、死ん・・・じまっ」

「セシル」

「うんっ！」

ズシャッ

どこから出したのかセシルは真っ黒い刀身の両刃剣を抜いて船主の胴体を切断した。

血が噴き出すより凍りつくのが速かったので、飛び散るようなことは無かった。

上半身が凍った水路の表面にごろんと転がり落ちる

「さて、良かったら正解を教えてくださいませんか？」

「そうだな、できれば死ぬ前をお願いしたいね」

4 - 4 「労働祭、影の都」(後書き)

4 - 5 「二人の世界」

物心付いた頃から私は孤児だった。

母親の愛情を知らず、父親の背中の大きさを知らず
私は今まで生きてきた

ある日私は養子として貴族の家に引き取られた

その貴族の家で、私は酷い扱いを受けていた
両親から、兄や姉たちから

「申し訳ありません」

ごめんなさいと言うと「馴れ馴れしい」と言われて、思い切り叩か
れるので私はいつもそうやって謝っていた

本邸から離れた薄汚い小屋に住まわされ、食事も残飯だけ、服もぼ
ろ布のようなものしか与えられず・・・

本当に奴隷のような扱いを受けていた
初めてこの人たちと会った時は優しくしてくれて、血は繋がってな
いけれど本当の家族のようになれる気がした。

でもこの扱いは何だというのだろう、私は毎晩冷たい床の上で声を
殺しながら泣いていた

それでも私はこの家から逃げ出そうとはしなかった。
どんな扱いを受けようと、虐げられようと、初めて会ったときのあ

の貴族たちの笑顔、そして病気や怪我をしたときには医者呼んで看病してくれたこと……

足枷が私をこの家に留まらせた。

僅かで淡い希望が捨て切れなかった。

でも、それは悲しいくらい残酷に、あっけなく消え去っていった。

「新しい家族だよ」

私より小さな男の子が、私と同じように身寄りの無い男の子がこの家にやってきた

「この人がお前のお姉さんだよ」

貴族の男が私を指差してその子に言う

「……僕の……姉さ、ま？」

その後男が信じられないことを言った

「ああ、もうすぐこの家を出て行くがな」

その子は生まれた頃から奴隷として生きてきた。

私と違って養子としてこの家に来たわけではない。

だから反抗的な態度は一切とらない、どんな仕打ちにも表情ひとつ変えない

だから、この子より役に立たない私は要らなくなった

私が病気になったときに看病してくれたのも、「自分の家で死んだら処理に金がかかる」だけのことだった。

この国では奴隷は「形式上」禁じられている。だから「形式上」は養子として貴族の家に売られていく

思えば看病しに来てくれたのも、医者が来る日だけだった。

外に連れて行くときだけちゃんとした服を着せてくれた。

表向きは家族に見せるため、それだけのため

あるとき私はそれを僅かな愛情だと錯覚していた

でも、そこに愛は無かった

・・・馬鹿馬鹿しくなった

自分が、この「家族」が・・・

生きることが

大声で泣き叫びたかった、でもそれも許されない
私は「奴隷」で「人間」じゃない

奴隷はただ人形のように感情を押し殺して、機械のように働かなければならない
それができたのも僅かな愛を感じていたから
ささやかな希望を抱いていたから

だから今まで、どんな仕打ちにも耐えてきた

でも私は気付いた

ああ、きっと私はこの世界では要らない子なんだな

自分の信じていたものがガラス細工みたいに簡単に壊されて、崩れていった瞬間

もう私の心は壊れてしまった

壊れた心の代わりに、何かが私の中で目覚めた

気が付いたら「家族」だと思っていた人間たちが全員氷づけになっていた。

恐る恐る触れてみたら、簡単に粉々に砕け散った

さっきまでの私と同じように、あっけなく

なんだ、人間なんてこんなものなのね
とても弱くて、そのくせ愚かで、矮小で・・・可哀想な生き物

少し自嘲気味に笑っていたら、一人だけ動いている者がいた

「・・・姉・・・さま？」

この子だけは凍らないでその場にいた
驚いているのかどうかも分からなかった、全く表情が変わらなかったから

「貴方は私なんかよりもっと早く壊れてしまったのね・・・」

「姉さま・・・寒い」

そつとその子を抱き寄せる

「大丈夫・・・私が暖めてあげる、私たちは家族なもの」
「家族・・・？」

私は頷いてぎゅつとその子を抱きしめる

「そつ、私は貴方の世界でたった一人の・・・家族なの」
「じゃあ・・・僕は姉さまのたった一人の家族なの？」

「ええ、そうよ・・・私たちは家族・・・だから」

ずっと一緒

いつまでも、どんな時も

「・・・家族」

その子が少し笑ったように見えた

その時私の中で憎しみや悲しみ、負の感情以外の別の何かが生まれていた

「私が貴方を守ってあげる、だから・・・貴方は強くなって私を守って」

愛情、それとはまた違う・・・でもとてもよく似ている何か

私たちだけのこの世界、二人だけのこの世界
それしかない、それ以外は知らない

みんなみんな・・・邪魔だから壊してしまおう

私たちの存在をこの世界に知らしめてやろう

もう今更私たちは・・・

「人」には戻れない・・・

でも悲しくは無い、だってこの子がいるから

「ねえ、貴方・・・お名前は？」

4 - 6 「凍てつく風、凍てついた心」

辺りは一面凍りついていて、不気味なぐらいの静寂を更に強調させていた

凍りついた空間の中心に一人佇む少女は薄笑いを浮かべている

「ふふふ・・・この街では昔ね、奴隷制度というものがあったのよ。表向きは養子という形で孤児たちが貴族の家に引き取られていったわ」

ディナは妖しげな眼でシオンとリドルを見つめる

「・・・奴隷として」

（あの眼・・・良くないな）

眼の色だ、魔力を繰って闘うものの中でシオンたちに敵意を示し、脅威となりうる連中は大抵眼の色が普通の人間と違っていた

（曇りきったあの眼・・・濁りきったあの眼、飢えた肉食獣のような眼だ）

そういった眼をした連中は誰彼構わず殺して、壊して、喰らいつくし、そして最後にはまわりを巻き込めるだけ巻き込んで自分も死ぬ

（あの眼になるには相当酷い過去、いじめ、暴力、虐待、差別・・・

この年で全く酷な・・・)

眼を見ただけでどれだけ辛い過去を送ってきたか、ある程度感じ取ることができる

ディナもそうだが、酷いのはセシルだった。

ディナが来てからのセシルの目は瞳孔が完全に開ききっていて殆ど真っ黒だった

どんなに強い心を持ってしても、未だ幼いあの少年にどれほどの地獄があつたというのか

想像したくも無い

(負の感情が心を強くし、魔法を生み出す。でもあの子はそれに耐えられないで完全に壊れてしまった・・・)

世界の闇が生み出した、悲しい存在
それがあの二人なのかもしれない

「私もセシルもある貴族の家に奴隷として引き取られたの。もうその家は無くなってしまうたけれど」

シオンたちは大体の状況を察した

かつてこの国では影で奴隷の売買が行われていた。
表向きは孤児として、代金は孤児院への寄付金として

そうやってこの二人のような子どもが大勢鉄錆臭い血と欲望が渦巻く人の闇の中に放り込まれていったのだろう

恐らく少し前に戦争でもあったのだらう。だから孤児が多くなる戦争で国が揺らぐ、人の心が揺らぐ

その揺らぎが、人の歪んだ心が、こうした悲劇を生み出す

そして奴隷制度が明るみにでたとき、民衆から猛反発が起きる民衆を強引に押さえつけるほどの力も、もう無くなってしまったのだらう

貴族や王族の人間はまず謝罪を行う

「奴隷」ではなく「民衆」に

そして奴隷制度が撤廃され、奴隷だった人間も普通の人間として生きていくことを許された

それに伴い「労働祭」という形で貴族たちから民衆への労いが行われた

反省の意を強調したいがために始まった、これ見よがしにと言わんばかりの行事である

つい先日まで散々悪行の限りを尽くしてきた者たちが手のひらを返したように

「奴隷制度などというものはあってはいけないものだ」

などと抜かすのである。

だが、実際に人として生きていけた「元奴隷」は皆無である

民衆がはん反発したのは

自分たちまで被害に遭いたくないから

貴族の連中だけいい思いをしてずるいと思った

本心は結局それだけなのである

奴隷になるのは皆身寄りの無い者たちだ

だから助けてくれる人間なんて誰も居ない

誰も奴隷を人間だなんて思っていない

それ以下の存在としか見ていない

だから助けようなんて思わない、奴隷を助けるなんて

死にかけた蛾を助けるのに等しい、それぐらいにしか思っていないかった

仮に助けたとしても、それは自分自身の優しさを他に示したいだけで、自分を美化する行為に近い

人間は、人間以外の生き物にはどこまでも残酷になることができる人間は、善意を押し付けて自分をよく見せることができる

かつて奴隷だった彼女はそう悟った

「だからね、私たちも人間・・・特に大人に残酷になることにしたの。見つけたら全て壊してしまうことにしてるわ。でも子どもは壊さないでおくの。親のいないという孤独から少しずつ壊れていくのを見て愉しむのよ」

「人間はそんなに醜いか？」

シオンはディナに聞いた

ディナは少し不満そうにシオンの方を見て

「ええ、とても」

とだけ言った

「人が全て悪だなんて思っちゃ駄目だよ、きつと・・・」

リドルが言おうとしたが、ディナが強い口調でそれを遮る

「私たちが見てきた人間は全員悪だったわ！ 私たちにとってはそれが人間の全てなの、そうやって下らない言葉で繕わないで！」

「・・・下らなくなんか、無いよ。だって僕は今までいろんな人に会って来た。いい人にも、悪い人にも」

自分の行いを悔いて、国を去っていった者
その者を慕い、影から見守り続ける者たち

自分の無力さを呪い、死に場所を求めて仇討ちをする者
人知を超えた領域で一人の人間を愛した者

旅の途中でであつた者

「君たちが出会った人たちが全て悪なら、それが君たちにとっての人間の全てなのかもしれない。でも僕たちにとっては違う」
リドルが真剣な表情でディナに訴える

「そう、それは良かったわね。でも私たちは私たちのしたいようにするわ」

「させない」

リドルを中心にフツと風が巻き起こる

それを合図にシオンは剣を抜く

セシルは殺人衝動に駆られ、目をキラキラと輝かせる

「貴方たち、お名前は？」

「リドル」

「シオン」

「なら、止めて御覧なさいな。リドル、シオン」

周囲を包み込んでいた白い霧が晴れて、冷気も収まる

「私たちを殺してでも、止めて見せなさい」

私たちはもう、自分では止められ所まで来てしまった
でも後悔はしていない

私とセシルと

二人がいれば何も要らない

他に価値あるものなど、この世界には在りはしないのだから

4 - 7 「沈黙の暗黒街」

「な、何だあれ・・・」

「水路が凍っている・・・」

「誰かいるわよ、船の上・・・っ」

白い霧が晴れたら周りに人だかりができていることに気が付いた

「人がこんなに大勢・・・いつの間につ？」

誰かが近づくような音は聞こえなかった。

霧が晴れた途端に大勢の人、多くの話し声、足音、物音、ざわめき、雑音

これだけの、耳障りなまでの大きな音に今まで気付かないわけがなかった

普通ならば

「君の魔法だね」

リドルはディナの魔法によるものとすぐに気付いた

「やっぱりアイツも魔法使いか」

シオンが確認するように言うと、リドルが頷く

「ふふ・・・賢いのね」

サイレント
沈黙の暗黒街

自分を中心とした一定の範囲の空間内の音を消し去る魔法

ただし術者は任意に無音化しない音を選ぶ

（今回の場合は霧の内外の音の行き来のみを対象に使用した）

この霧はディナの別の能力によるもので、「サイレントダーク」とは関係ない

ディナは周囲で騒いでいる人間たちを吟味するように見回した
その中で子どもを連れていた男女が水路の上の架け橋の上にいるの
を見つけた。恐らく家族で祭りに来たのだろう

子どもはまだ5、6歳程度の幼い男の子だった

その子どもと目が合った瞬間にディナはニツコリと笑った

「セシル」

ディナが言った瞬間セシルが船の上から跳んだ。向かう方向はその
親子の下

「あははっ」

親子はまだセシルがこちらに向かって跳んだことにすら気付いてい
なかった

セシルは父親の目の前まで来たら思いっきり持っている剣で思いっ
きり横に薙いだ

「・・・?」

手応えが無い・・・

見てみるとそこには腰を抜かして驚く父親と、それに寄りすがって泣きじゃくる子どもと母親

目の前にはさっきまで自分の近くに居た銀髪のアホ毛の少年

「させない」

リドルは自分の鞆から取り出した分厚い本でセシルの剣を受け止めていた

「何だよあれえっ!」

「ひいつつ!!」

ようやく状況を理解した周囲の人間たちが慌てふためいてその場から逃げようと走り出す

「うふふ、いい眺め」

逃げ惑う民衆を見てディナが微笑む

「.....」

シオンはディナが何か企んだような顔をしているのを見て、警戒していた

自分まで戦闘に参加したらこの少女は何をするか分からない

それにあの少年は見る限り戦闘タイプ、特殊な魔法を使うわけではない

今のところは基本的な身体強化の魔法しか使っていない様子だった

警戒すべきはこの少女の魔法

今までで使ったのは音に関する魔法と冷気の魔法

どちらも範囲が広いが、一つ一つはそれほど厄介ではない
二つ同時に使われることこそが厄介なことだった

音が無いから目で見ないと分からない
常にあの動きに注意していないと、何をされるか分からない

気付かないうちに周りの人間が全員殺されていた、ということも有り得る

恐らく既にその能力で・・・

「邪魔あ・・・っ」

セシルはもう片方の手でまた剣をどこからか出してがら空きになる反対側の横っ腹に向かって剣を振った

キン

また手応えが無かった

今度は剣で受け止められていた

セシルと同じで先ほどまではどこにも見なかった本が突如リドルの手に現れていた

「何でえ・・・？」

セシルは何故リドルの持っている本には傷一つ付いていないのか、どこからリドルは剣を取り出したのかが不思議で仕方が無い様子だった

更にはリドルの持っている剣は、セシルのそれと比べるとかなり細身の剣だった

レイピアのような突きを主体として戦うための剣の腹の部分でセシルの大剣が受け止められるということは物理的には考えがたい

「さあ、何でだろうね」

言った直後リドルは魔法で突風を巻き起こしセシルを船の方へ吹き飛ばす

「うわっ」

体制を崩し風に飛ばされているセシルを、それより速い速度で飛んで追う

セシルに追いつくとリドルは突きを繰り出す
狙いは足

リドルはまだ命を取るつもりは無かった
足を狙って動きを止めるという考えで動いていた

「わぁー・・・」

ガキン

リドルの突きは突如目の前に現れた氷塊によって途中で止められた

「・・・」

剣を引き抜いてリドルはディナの方を見る

「安心してね、まだここにいる人間は誰も殺してないわ」

視線に気付いたディナは微笑みかける

「・・・!!」

リドルは目の前に弱めの突風を起こして自分を横に飛ばした
その直後に自分がいた場所に氷塊が現れる

「あら、残念」

アブソリユート・ゼロ

ディナのもう一つの魔法

自在に氷を出現させる魔法

先ほどの白い霧も、微細な氷が無数に空中を飛び回って作り出した
ものである

「うーん・・・」

ディナはわざとらしく考え込むような素振りを見せた後一言

「逃げましょうか、セシル」

「うん、姉さま」

セシルは言われるとすぐにディナの元に飛んでいった

「・・・リドル!!」

マズイ、逃げられたらあの姉弟を見失う

「分かってるけど・・・!」

近づこうとするとディナの氷が邪魔をする

仮に追いついたとしても、セシルとまともにやりあうことになる

正直接近戦では分が悪い

シオンならセシルには勝てるが、ディナの氷がそうはさせてくれない
標的をまだ逃げてない街の人間に向けられたら、リドルの反射速度
では対応しきれない

周りの人間を庇いながら戦うというのは相当にやりづらいものだった

「ふふふ、では御機嫌よう」

二人は細い通路に逃げ込む

先ほどより更に濃い白い霧が辺りを包みだして、ディナとセシルの
姿を隠す

「く・・・っ」

ここで逃がしてしまつては取り返しが付かない

リドルが強風を巻き起こして霧を吹き飛ばし、シオンがそこに突っ

込む

だが既に姉弟は居なくなっていた

「くそ・・・っ」

悔しさからシオンが壁を叩く

「・・・・・・・・っ」

リドルがその場に力無く立ち尽くす

これではいつどこで「何をされても」音がしないので気付くことができない

物音も、悲鳴も全てディナのあの魔法でかき消されてしまう

入り組んでいてその上広いこの街でたった二人の人間を目だけで、すぐに見つけ出すのは不可能に等しい

更に悪いことに、シオンたちは知らなかったがディナの「サイレントダーク」ではディナとセシルだけは普通に音が聞こえるようにすることも可能だった

この魔法は相手の虚を突くことに関しては最高に優れた魔法である

一度目を離せばそこでおしまいだった

・・・普通ならば

4 - 8 「血染めの宴」

「ふふふ、どうしましょうかセシル」

人気の無い裏通りを走りながらディナが問いかける

「壊そう姉さま、いっぱい、いっぱい」

壊すんだ、何もかも

音も無く二人はただ走っていく

その歪んだ欲望を満たすための獲物を探すために

「ふふ、近いわ・・・」

出鱈目に入り組んだ通路を走っているように見えたが、二人の研ぎ澄まされた感覚は確実に獲物の臭いをたどっていた

少しずつ距離を詰めていく。相手はディナたちに気付いていないようだ

「5人くらい居るわ・・・良かったわね、セシル」

「うん！」

6人の若い男女だった。派手でだらしない格好で大手を振って歩い

ている

女の方が何か話すと、男の方が大げさな反応をする

ディナたちは後ろで彼らの様子を見ていてほくそ笑んだ

「浅ましいわね、がつつきすぎですわよ？」

その声を聞いた男たちが足を止めて、後ろを振り向いた

「・・・ああ？」

三人の男はそれぞれ凄んでみせてディナを睨みつける

「子どもかよ・・・」

「餓鬼は早くママんとこに帰りな」

自分たちより身体の小さいセシルとディナを見て、男たちは確実に油断している

戦ったことの無いこの若者たちは、外見の強さでしか相手を測ることができなかった

「まるで自分たちが大人でいるつもりの言い草ね、セシル」

「そうだね姉さま。こいつら僕たちより弱いのに強い氣でいるよ」

二人は示し合わせたように笑い出す

「・・・！」

男たちが一歩前に踏み出すのを見て女たちが

「ちよつとやめなよお」

「止めておきなさい、見栄のために命を捨てるなんて無意味よ」
「は？」

「駄目だこいつ・・・本の読みすぎだぜ、きつと」
「正義の味方気取りかぁ、ぎやははは」

男たちは笑っていたが、少し脂汗のようなものをかいていた
どんなに鈍感な者でも、デйнаとセシルがずっと殺意を向け続けて
いればすぐに気付くだろう

だが男たちはこの正体不明の不安が目の前の二人の子どもからの殺
意だということに気付いていない

「下卑た笑い声、それで誤魔化しているつもり？」

「おい・・・あんまり調子に乗ると・・・」
わざとらしく男のうちの一人が拳を振り上げる

だが二人は笑ったままで全く動じない

「姉さま、こいつきつとカノジョの前だからカッコつけようとして
るんだよ」

「そうねセシル。弱い生き物は見せかけの強さに頼ることしかでき
ないものね」

二人の安い挑発に男たちはあっさりと乗せられた

「てめ、このやる・・・!!」

男が思いっきり拳を繰り出す

ザシュッ

「あははっ」

セシルが満面の笑みでその腕を切り捨てる

本体から離れた腕が赤い飛沫を撒き散らしながら宙を舞う
その間にセシルは続けざまにもう片方の腕を斬った
まだ男は斬られたことに気付いていない

そして右足、左足
最初に腕を斬ってからこれまでの動作は一秒に満たない僅かな時間で行われた

「・・・え？」

視界が急に下に落ちていくことで男はようやく自分の異変に気付いた

「ひ・・・・・・・・・・」

後ろに居た女たちが

「いやあああああああああ！！！！！！！！」
悲鳴を上げる

「あ、あがが、はぐっ・・・」

四肢を一瞬にして失った男はもがく事もできずに地面にうつ伏せになり、苦悶の表情を浮べている

「ふふふ、弱いつて愚かね。貴方が本当に強ければこうなることぐらい分かったはずなのに」

「ひ・・・！！」

男はビクツと怯える

今なら分かる、この二人はヤバイ
ただ強がって偉ぶっていた自分とは違う

声が、目つきが、動作の全てが恐ろしい
自分の常識の範疇を遥かに超えた、この二人

死に直面した今となって自分のか弱さを思い知らされる

「姉さま、こうつもう壊していい？」

「ひ・・・やめ、止めてくれ・・・」

後ろの五人に助けを求めようとしたが、既に五人はそこに居なかった

「・・・・・・・・！！」

「逃げたわよ、あの人たち」

「そ、そんな・・・」

「当然でしょう、虎に捕まった一匹の鹿を助けに来るなんて・・・
ねえ？」

「裏切りやがった・・・！」

その言葉を聞いてディナは大きな声で笑い出した

「あはははは、貴方・・・少し、足りないんじゃない？ 私たちから見れば貴方たちなんて所詮一人では何もできない弱者。だから群れている、けどお馬鹿な貴方たちはそれで自分たちが強くなったと勘違いするの」

ディナは思いつき男の顔を踏みつけた

「はぐうつ」

「一人になった途端に随分と弱気になったじゃないの、ねえセシル？」

「うん、姉さま。・・・いい？」

「ええ、どうぞ」

セシルが思いつきり剣を振り上げる

「わーい」

「待ってくれ、まだ俺」

振り下ろす

「ふふふ、おばあーかさん」

五人の男女は必死で逃げていた
残された男のことなど全く気になどしていない
優先すべきは自分が生き残ること

「あつ」

女が一人躓いて転んだ。誰も助けない

「ちよつと・・・ちよつとおー!」

声は四人には届かない。急いで立ち上がろうとする

（やばいやばいやばいって・・・追いつかれたらあたし・・・!）
急いで走り出そうとする、その女の肩をやさしく触る者が居た

女の表情が凍りつく

「可哀想、見捨てられちゃったのね」

ゆっくりと振り返る、恐怖で両脚がガクガクと震える

「ふふふ」

振り返った瞬間見えたのは、満面の笑みを浮べるディナと、自分の横を猛スピードで通り過ぎていくセシルの姿

次の瞬間には女は凍りつき、その次の瞬間には粉々になっていた同時にセシルの向かった先で男女の断末魔の叫びが聞こえた

「あああああああああああ！！！！」
必死で逃げる３人。二人目の男は数秒前にセシルに細切れにされてしまった

残った二人の女のうち、後ろを走っていたほうの女が前を走る女の髪を掴んでグイと引き寄せた

「あっ……！！」
バランスを崩して女が倒れる。それを無視して髪を引っ張ったほうの女は走り去る

「何すんのよ！！！！」
立ち上がりながら女が叫ぶ

「五月蠅い、あんたはそこで殺されてな！！」
酷い言い様だった、つい数分前には仲がよさそうに談笑していた者たちがこの様だ

「てっめええええええ！ぶつころ」

言い終わる前に女は凍りづけになった

「駄目よ、レディーがそんな言葉遣い」

言いながらディナは凍り付けの女を指でピンと弾く。ガラガラと砕け散り、女が助かる可能性は0になる

「何なんだよ！！あいつら！！！」

「知らないわよ!!」

残された二人の脚も限界が近づく、息も絶え絶えといった感じだ

「こ……これだけ走ってりゃ……」

男が後ろを振り返り、あの姉弟がもう追ってきていないかどうか確認しようとする

「振り切つ」

振り返ると目の前には跳び上がって剣を振りぬくセシルの姿が

「た」

その姿を確認したときには男の顔の、鼻の頭の辺りから上が吹き飛んでいた

それを見た最後の女は発狂したように走り出す

「ああああああああああ！！！」

突如目の前に氷の壁が現れ、女の行く手を遮る

「嫌、嫌・・・嫌あああああああああ！！！！」
ドンドンと女は壁を叩くが、全く壊れる気配が無い

「ふふふ、追いかけてこはおしまい」
「楽しかったー」

「やめ、止めて・・・」

セシルがゆっくりと一歩ずつ女に近づく

「止めて、止めて・・・止めてってば、あたしが何したって」

ブシュツと嫌な音がした後に、氷の壁が真っ赤に染まった

「何もしなくてもね、人は人を殺せるのよ」

「姉さま、僕もつと壊したいよ」

「ええ、そうね・・・まだまだ足りないわ」

セシルとディナは再び次の獲物を求めて走り出した

4 - 9 「風の如く、駆け抜ける想い」

シオンたちは街中を駆け回って姉弟を探し回っていた

「ここも・・・っ」

氷付けになった人、切断された人

辺りは血で真っ赤に染まっていた

あまりの光景、鼻がつぶれてしまいそうなほどの悪臭にシオンは顔をしかめる

「早く見つけないと・・・」

シオンがそう促すが、リドルは動かない

「・・・リドル？」

声をかけても、黙って俯いたままである

数秒遅れて

「シオン」

リドルが顔を上げて返事をする

「僕、言ったよね。次はちゃんと戦うって」

そう言ったリドルの表情は何か腹をくくったようで、それでいて・・・

・

「止められると思ってた、まだ救えると思ってた・・・」
どこか儚げで、悲しげで

「でも・・・駄目かもしれない」
今にも崩れてしまいそうな、そんな気がした

「・・・もう、これ以上巻き込むわけにはいかない。だから・・・」
！

シオンはリドルの覚悟を受け取って、そして

「ああ・・・分かったよ」
とだけ、返事をした

「ああ、嬉しい。人を壊すって本当に嬉しいわ」

「姉さま、そいつまだ生きてるよ」

セシルが地面に倒れているたくさんの死体の中に、まだ息がある者を見つけた

「あらあら・・・それは大変」

見つけたことに怯えるその死にかけの獲物は涙でぐしゃぐしゃになった顔で、命乞いを始める。それを眺めてひとしきり愉しんだ後、セシルが脳天を叩き斬った

「鉄臭い血が私たちの揺り籠、断末魔の叫びが私たちの子守唄」
「もっと探そう、まだこのあたりに一杯隠れてるよ」

「ええ、そうねセシル。でも子どもは壊しちゃ駄目よ」

「うんっ」

そついいながら通路の脇に設置してあるゴミ箱のふたを開ける

「ひっ」

中には中年の男が一人隠れていた

「た、助け」

「あはは、本当にゴミみたい」

言いながらセシルは剣を突き立てる。

二度、三度・・・

その度に男はピクピクと震えながら血を噴き出す

「広場にいた人間はこれで殆ど全員かしら」

「うん、殺したー」

話している二人の背後に、一人の男が現れた

「よくも私の・・・」

気が付いたディナが振り返る

「あら、さつき見た顔ね」

「逃がしちゃった奴だよ、姉さま」

ふーんと言いながら男を見つめるディナ

「よくも私の妻をおおお!!」

猛然と走りながらディナに向かってくる男。勢いよく拳を繰り出す

「触らないで下さる?」

ディナがそう言うと、男の拳がディナに触れる寸前で、凍りつき、一瞬で碎ける

「・・・っ!!!」

男は声を出してもがこうとしたが、声を出そうとしても出せない

「ふふふ、中から凍らせるのも面白いわね」

「・・・・・・・・っ」

男はその場に崩れこみ、動かなくなる

「あらいけない、心臓まで凍らせちゃったわ」

ちつとも残念に思っていない様子で、デイナはクスクスと笑う

「・・・・・・・・見つけたよ」

声がした。

デイナは驚いて声のするほうを向く。その先にはリドルとシオンが居た

「何故分かったの・・・・？」

「沈黙の暗黒街」が発動している限り、悲鳴などの音がこの二人に届くことは無い。なのに何故こうも早く見つけられてしまったのか

「音とはつまり空気の振動。風の魔法を扱う僕にとって空気の流れを感じ取るとは簡単なこと」

つまり、空気の流れが止まっている場所・・・「音が全くしないところ」を探し出したというのだ

「ありえない・・・・そんなのいくら魔法が使えるからって、到底できる芸当じゃ・・・・」

この広い街の全体をそうやって探したというの？

だとしたら、また逃げてみすぐに見つかってしまう。それ以前に同じ手が通用するとも思えない。きつとまた白霧の魔法「ダイヤモンドダスト金剛霧」で逃げようとしてもすぐに風で吹き飛ばされる・・・

「もう逃がさない。ここで君たちを仕留める」

リドルは剣を突きつける

「ふふ・・・いい眼をしているじゃない、貴方・・・」

デイナは両手をかざして、戦闘の態勢をとる。向こうもどうやら本気らしい

「貴方も私たちと同じ・・・暗い闇の中からで来た者の眼・・・。しかも私たちよりも大分濁っている・・・それなのに何故そうやって居られるの？」

デイナの問いにリドルは答える

「そう在りたいと願ったから。また光の中で生きたいと願ったから。願ってくれる人たちが居るから」

「そう、貴方にはそういう人たちが居るから・・・でも、私たちに居なかった！！」

もの凄い冷気が迸る。周囲の建物が一瞬にして氷付けになってしまった

「何で私たちはっ！！どうして私たちがっ！！」

無数の氷の飛礫がリドルたち目掛けて飛んでくる

「はっ！」

シオンが剣を思いっきり振り、その剣圧で飛礫を振り払う

「何故私たちに冷たくするの？」

二人の頭上に巨大な氷柱が現れ、落下してくる

「だあああああっ！！！！」

シオンは飛び上がってそれを両断する

「すごいねーその剣」

目の前にはセシルが居て、既に剣を振る動作に入っていた

空中では動作が僅かに鈍ってしまっ、シオンの反応が僅かに遅れた

「ちょー・・・」

間一髪でシオンはセシルの剣を受ける

「だいつ!!」

もう片方の剣が襲い掛かる、だが

「ふわっ!!」

突如セシルが真横に吹っ飛ばされる

（本来ならありえない位置から突風・・・一体？）

リドルは地上に居た。そしてセシルは地上10メートルほどのところに居た

だがリドルの風の魔法は空中に居るセシルを、真横に吹っ飛ばした通常の魔法は術者から放たれ、今のような位置で発動するなど在り得なかった

「・・・な!」

ディナが気付くとリドルはもう吹き飛ばされている最中のセシルに向かって飛んでいた

最初に見たときは比べ物にならない速さだ。

このままでは氷の魔法で壁を作る前にセシルが攻撃を受けてしまう。そしてディナとリドルではディナの方が距離が近かった

選択肢はひとつ

ドス

「姉さま・・・?」

リドルが突き刺したのは、セシルではなくディナの肩だった。
剣を引き抜くリドル。

「怪我は無い・・・セシル」

「姉さま・・・血・・・」

「平気、私は大丈夫・・・」

セシルは両手の剣を強く握り締め、リドルの方を向いた

「姉さま、僕が守る」

「・・・セシル？」

「姉さまは僕が守る！！！！！！」

セシルがリドルの方につっ込んできた

「わあああああ！！！！」

「止めなさいセシル！！」

ディナの声も聞かずセシルは剣を振り下ろす

だが、力任せの一撃はリドルにあっさりとかわされる。二撃目も難なく避けられてしまい隙ができる

「セシル！！」

力が抜けて動けない、集中力が落ちてしまっているから魔法もすぐには使えない

「姉さま、ごめん」

リドルの剣がセシルの心臓を貫く瞬間
そう聞こえた気がした。

4 - 10 「溶けない氷、溶ける心」

笑顔だった

死の瞬間、彼は笑っていた

愛しい人を悲しませないために

せめて笑って終わりにしよう

「あ、ああ・・・」

ディナは力無くその場に崩れこむ

リドルはセシルの胸に刺した剣を引き抜く。真っ赤な血がドクドクと噴き出してリドルの剣を真っ赤に染め上げる。

返り血が顔にかかっても構わず、ディナの方に歩み寄る

ごろんと地面に横たわったセシルにすがりつきながら、ディナは何度も名前を呼び続ける

もう二度と動かなくなったことを理解したディナは、開いたままのセシルの目をそっと手で閉じて、セシルの身体を抱き寄せる

「・・・どうしてこの子ばかりこんなに辛いに遭わなければならなの？」

セシルの胸に顔をうずめたまま、ディナは消え入りそうな声でそう言った

「どうしてこの子ばかりにこの世界は辛く当たるの・・・？」

本当なら、強い父の背中に憧れ、母の優しさに包まれ

兄弟たちとは喧嘩をしながら、それでも仲良く、それでいて楽しく
そうやって育っていくはずだった

普通に友達と遊んで、普通に親の仕事を手伝ったりして、そして普
通に社会にでて、働いて、結婚して、子どもを産んで、家族ができ
て、いつかは大切な人たちに見守られながら息を引き取る

そんな普通すらこの子には許されることは無かった
誰もこの子に優しくなどしてくれなかった

もし、この子に優しくしてくれる誰かにもっと早く出会えていたら
違った未来があったのかもしれない

でも、その未来が訪れることは無かった
それがこの子のあまりにも残酷な結末

ただ、不運だったというだけで・・・
それだけの理由で

「もういいわ・・・これでお終いにしましょう」
ディナの足元が凍りつく。リドルたちは警戒をする

「私一人がこの世界に残されるのは・・・辛いわ」
ディナとセシルを冷たい氷が包み込む

「生きて行こうとは、思わないの？」
リドルが問いかける。とても悲しそうな目で、声で

「ええ、私は貴方たちみたいに強くはないもの。一人では何もできない哀れな存在・・・だからこの子が居なくなっただけ・・・」

「そう、なら止めないよ」

リドルがそう言う時にはディナたちは腰の辺りまで凍り付いていた

「それにね、私たち・・・幸せよ。一生懸命生きてきたもの」

下半身は完全に凍結して、相当な痛みをディナは感じているはずなのに彼女は笑顔を崩さない

「どんな時でも笑顔で・・・そうすればいつかきつと神様は微笑み返してくれる・・・」

肩の下まで凍ってディナはうわ言のようにしか喋らなくなった

「リドルって・・・いった、かしら」

リドルは無言によって肯定の意を示した

「貴方・・・兄弟は？」

「姉さんが・・・」

そう言うときディナはまたにつこりと微笑んだ

「そう・・・なら、お姉さんを・・・大切に・・・ね？」

リドルはまた黙って、今度は頷いた

「最後に一言だけ、言わせて・・・」

もう首の辺りまで凍ってきて声も出にくくなってきていた、それでもディナは必死で口を動かしてリドルに言葉を伝えようとする

二人は完全に凍りついて、動かなくなった
そして数秒後、氷にヒビが入る。それはどんどん大きくなって、全体にまで行き渡った瞬間に、氷は砕け散って砂のように風に乗って飛んでいった

「なあ、何て言ってたんだ？」

シオンがリドルに聞く。リドルは少しぼーっと遠くを見ているような目をしていた

「リドル・・・？」

リドルの目からはボロボロと涙が零れ落ちてきた

泣いている・・・？

「僕・・・あの二人、を救って・・・あげ、られたの、かな・・・。
これで、よかつ・・・良かったの・・・かな？」

リドルは滅多に泣くことが無い。シオンと会ってから数えるほどしか泣いていない
まだ十代の半ばにも満たない幼い初年にしては辛抱強いところがあった

そのリドルが大粒の涙を零しながら、嗚咽を漏らしながら泣きじゃくっている

それだけ自分の心に押し込んでいたものがあつたのだろう
きつとリドルはこの姉弟に自分を重ね合わせていたのかもしれない

その二人をリドル自身の手で・・・

自身の四肢を切り落とすくらいの痛みを今感じているのだろう
そんな彼に不用意な優しさや慰めは要らない

だから相棒として、本当の兄のような存在であるシオンにできること
そつと肩に手を置いて

「頑張ったな」

たったそれだけ、それだけで十分だった
リドルの目からは涙が途切れることは無かった
まるで氷が熱で溶けていくように

「
あ
り
が
と
う
」

4 - 11 「それでも僕らは旅をする」

きっと彼女は止めて欲しかったのかもしれない
自分では抑えられないその歪んだ衝動を・・・

もしもこの世界に生きる人間がみな平等だと言う者が居るのならば
僕はそいつを思いつきり殴ってやりたい
彼女たちの生き様を見せてやりたい

どの軽口がそんな残酷な台詞を平気で吐けるのか
僕は、彼女たちの代わりに殴ってやろうと思う

彼女たちがどんなに辛い過去を持っていようと
あのような行為に走ってしまっても仕方が無いと言えるような理由
があつたとしても

それでも罪は罪
罰は受けなければならない

それは僕も同じ
多くの人を快樂のために殺したからと言って
それは僕が彼女たちを殺していい理由にはならない

話し合いで解決なんて悠長なことを言っている場合でもなかった
殺してでも止めるしかない

弱い僕にはその選択肢を選ぶしかなかった

彼女たちを殺した罪、そして罰

償って、許されようなんて思わない
どう償えばいいのかも分からない

この消えない傷は一生僕の背中に
重く、のしかかる

その重圧に耐えて、僕は生きていく

そして僕は一つ決めた

彼女たちが必死で生きてきた証を、僕が残していつてあげようと

僕は彼の遺した剣を手に取り、天にかざす

「一緒に行こう、どこまでも、いつまでも」

僕たちは旅をする

きっと悲しいことはたくさんあるかも知れない

それでも、僕らは

旅をする

エピソード〜そしてこれからも〜

目が覚めるとアイツが居た

「生きてるー？」

アイツは冗談半分、心配半分で聞いてくる。

焚き火が暖かい。どうやら薪を集めてくれていたようだ

「死ぬかも」

こっちも冗談半分、本気半分で言った。

わき腹を思いっきり斬られて、今は血は止まったが出血量が少し多かった。

人間は全体の三分の一が出血すれば死ねるらしい。

しかしあの傷でよく死ななかったなと自分でも自分の生命力の強さに驚く。

それ以前に切り口から妙な細菌が入り込んでいたら厄介なことになる。気のせいかな腹が痛い・・・寒さからか。

「本当に・・・死んじゃったかと・・・」

奴が何か言ったような気がしたが、よく聞こえなかった

まだ頭がぼんやりとしていた。血が足りないせいでもあるのだろうか

「腹が痛い・・・」

思わず声に出してしまったら、ソイツはブツと吹き出して俺にこう言う

「そりゃあそんだけカパツと開いたてたら痛いでしょ、冷たい風が沁みるだろうし」

ああ、確かにそうだ。自分でも笑えてくる

起き上がろうとすると鈍痛が走る。顔をしかめっていると奴は

「まだ寝てなよ、やっと目が覚めたばかりだし」

やっと・・・

そういえば俺はどのくらい寝ていたんだ？

随分と時間が経った様な気がするが・・・

「まだそんなに経ってないよ」

コイツはそう言って笑いながら薪を火にくべた。

その手は寒さで赤くなって少しひび割れていた。

燃え尽きて灰になった薪の量から考えると、結構な時間俺は寝ていたのだと思う

少なくとも2、3日程度はコイツに看病させていたということになる

「聞いていいか？」

俺が言うと奴は火を見ながら「ん？」とだけ言う

「一人でも行こうとか思わなかったのか、俺を置いて」
するとそいつは笑って答える

「思ったよ、一応。でもすぐに止めた、それだと意味が無いから」

「何の？」

「僕が旅をする意味。・・・と一緒に旅をしないと意味が無いんだ、きつと。姉さんを見つけるだけじゃ駄目な気がするんだ。それに・・・」

何やら恥ずかしいそうに奴は頭をかきながら俺の方を見て言う

「そんなことしたら、きつと姉さんにぶつた切られちゃうよ」

俺の中のコイツの姉のイメージがまた一つ凶悪になっていった

傷口には包帯が巻いてあるのに気付いた。いささか不器用な気がしないでもないが、無いよりはマシだった

「・・・ありがとうな」

「な、何をいきなり」

よほど俺に礼をされるのがこそばゆいのかコイツは照れているようだった

「そんな感謝の言葉よりも僕が欲しいもの、分かってるでしょ？」

ああ、そういう奴だったよコイツは

「分かったよ・・・。この傷が治って、次の街に着いたら・・・」

ふかふかベッド、だろ

「あと“オンセン”ってのにも入りたい。次の街にはあるらしいんだって・・・シオ・・・」

そこから先はまた眠ってしまっただけ覚えていない

どうやらまだまだ旅を続けられそうだ

あとがきタイムズ（前書き）

返事が無い、ただのあとがきのようだ

あとがきタイムズ

はい、gdgdでしたがひとまず本編は一区切りつきました
はじめましての方はじめまして(・・・)
そうでない方・・・

何故私の名を知っている

(・・・)どうも、白石礫(仮)です

この似非小説は、若干哲学的なことを背景にした似非ファンタジー
です

ただのファンタジー小説を期待していた方、申し訳ありません

第一話「これからできる町」

テーマは「新たな旅立ち」裏テーマは「償いのつもり」

生きていくと絶対に100点満点の取れない問題にぶち当たります、
どうかご注意を

第二話「夢の国」

テーマは「守りたいもの」裏テーマは「正義も悪も無い」

どちらも自分の大切な人や物のために闘っているとしたら、どちら
が悪いだなんて・・・言えますか？

第三話「出会いの中で」

まあ、第二話の蛇足的なものだとお考え下さい

テーマは「出会い」裏テーマは「彼らの旅路に」

名前は世界で一番短い私小説なのだと、とある有名な方が言ってお
られました

第四話「それでも僕らは旅をする」

テーマは「二人の分も」裏テーマは「悪いのは、誰？」

殺人犯も悪いですが、殺人犯にさせてしまった周囲の人間は悪くないのでしょうか？

関わらないことや知らないことも、それは一種の罪と言えるのでは？
まあ、ご近所付き合いって大事なのよ。とそういうことです（笑）

エピローグは時間軸が大分本編とずれてます

というか本編も時間軸はまちまちです

テーマは「唯一無二の相棒」裏テーマは「情ではない」

友情や愛情なんかとは比べ物にならないほどの強い絆、それが信頼です

一緒にして考えてはいけません、友達や恋人だって裏切る時は簡単に裏切ります

今回のテーマと裏テーマはこんな感じです、はい

正しい答えは誰にも分かりません

世界はそんなに単純じゃないし、人はそんな完璧じゃないですから

さて、この後は番外編ですが期待はしないで下さい
本編が暗すぎたので少し明るいお話を

・・・要するにただのギャグ回って奴です、ええ、はいはい

萌えもエロスもありません、あるのはただただシュールな空気だけです

地味にエピソードとリンクしてる節があります

あとがきタイムズ（後書き）

おお読者よ、まだ冒険を続けるかね？

外 - 1 「温泉の町」

シオンとリドルはとある宿場町に来ていた。

時刻は夕暮れ時、けれども多くの人が通りを行き交う。

旅人、商人、馬車、町の人たち・・・

活気溢れるとても豊かに見える町だった。

他の町などでは見かけない「着物」と呼ばれる衣服を纏った女性や馬に荷物を運ばせている男性など、一風変わった光景が二人にとっては新鮮だった。

建物も全て木造で、殆どが一階建ての低層住宅だった。「長屋」と呼ばれる集団住宅も歩く途中で何度か見かけた

「東の方にある島国の建築様式らしいよ。変わってるけど面白いよねー」

リドルがいつ手に入れたのか「黄金の国」というタイトルの本を読みながら言う。

「その島国ではね、建物が全部黄金でできてるんだって。すごいね流石黄金の国ジパングだよ」

何故か妙にテンションの高いリドルをとりあえず一度落ち着かせることにしたシオンは

「その本、大分昔の本だぞ」

裏表紙に発行された月日を書いてあったので確認したあと、指摘した。

「え」

十年以上前の本だった

数分ほどリドルの足取りが重くなった。何とも分かりやすい奴だな

とシオンは改めて感じた

「来たよ、シオン、来たんだよ僕たちは」

しばらくしたら元気になったリドルがまたはしゃぎ出す。だがシオンはやれやれと言わんばかりに溜息をつく。

とりあえずリドルがはしゃいだした場合、まずシオンにとって良いことは無いからだ。

（ああ、何か事件でも起きそうだな、おい）

ひどい言い様だった。だが実際そうなので仕方が無い。

事件を呼び寄せる力は物語の中の名探偵より優れているものがある

「オンセン」で有名なサクツの町・・・ついにここに辿り着くことができた」

リドルのお目当て、それは温泉と呼ばれる入浴施設だった。

何でもこの町の宿にはその温泉があつて、それはとても大きな浴場だとのことだった。

更に温泉の湯は通常の水と違い、鉱物などに含まれているミネラルなどの物質が溶け込んでいて、それが身体にとってもいいらしい自分が安らぐことに命をかけているリドルにとって、ふかふかベツドよりも魅力的な物なのだろう

「僕たちの旅の、一つの終着点でもあるこの温泉の都・・・。ああ、長い道のりだった・・・」

わざとらしく鼻をすするような真似をしているリドルを他所に、シオンは町を見渡した。

木造の建造物が立ち並ぶなか、其処彼処に高く聳え立つ灰色の煙突のようなものが見えた。

他の国の工業都市などで良く見た光景だった。違うのは周囲を包む匂いが油や鉄錆の臭いではなく、硫黄によるものだといくくらいだ

「銭湯・・・懐かしいな」

「シオン何か知ってるの？・・・オンセン」

「・・・ん、今何か言ったか？」

「え、あ・・・いや・・・別に」

「・・・何だよ、歯切れが悪いな」

シオンは自分で言った独り言を覚えていないようだった。

だがそれはまた別の話。番外編ではシリアスな話をする気は毛頭ないです、ありません

「わざわざ高い金を払ってまでこんな・・・もったいない」

シオンがなるべく安い宿にしようとしたらリドルが猛反論して、かなり高い宿に泊まることになってしまった。

リドルにとってどの宿に止まるかというのはかなり重要な意味を持つものだったらしい

「いいじゃないか、お金はたくさんあるんだし」

「手に入ったばかりでこんなに使ってたらずぐに無くなるだろ・・・ったく」

「・・・オンセンでは珍しい食材を使ったすごく美味しい料理が出るんだって」

「・・・珍しい、食材・・・？」

「うんうん」

「美味しい料理・・・」

「うん！うん！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・よっっ」

結局その町で一番豪華そうな宿に泊まることになった

「どこに泊まるかはお前に任せるよ、なるべく料理の美味しそうな感じするところ選べよ」

「おけおけー、任せなさいって」

リドルは魔法の腕前から分かることだが天才肌な面があるので、その一因かは知らないがとにかく勘がいい。推理小説の探偵並みに鋭いときがある

（普段は脳内が万年春みたいな奴だけどこういうときは頼りになるからなあ・・・）

「この町は人の出入りが多い分いい食材とかもたくさん入ってきてるんだろうなあ・・・ああ、楽しみだなあ」

予断だがシオンは料理を作るのも食べるのも大好きなのである。拘りに拘り抜いた彼の料理はそれはもう店を出したら大繁盛しそうなレベルのものである

こと食べ物に関してはシオンはよく思考を停止してしまい、本能に走る傾向がある。今回はそれを上手くリドルに利用されてしまう何とも間抜けな一面を見せるシオンであった

「レシピも聞いたら聞いてみるか・・・ああ、楽しみだなあ」

子どものように（実際子どもだが）わくわくしながら歩き出すシオンを見たりリドルは

「計画通り」

にやりと妖しげな笑みを浮かべながらシオンの後について行った

泊まることにした宿は、中に入ると一面小粒の砂利の絨毯が敷かれている綺麗な庭になっていて、枝や葉の形の整えられた植木が数本植えられていた。小さな池まであって小さな橋が架けられていた。橋の上から池の中を見ると、水面に見たことの無い珍しい魚が集まってきた口をパクパクさせていた

「餌よこせー・・・ってか」

シオンが何だか呆れたような表情で水面に群がる魚たちをじーっと見つめながらそうぼやいた

「綺麗な模様の魚だねー」

食べられるのかな、とリドルが呟くのが聞こえたのでとりあえずシオンは止めとけとリドルに言った

「ああ、そうか」

シオンが突然言い出したのでリドルは訝しげな顔で

「何が、ああそうか・・・なのさ」

魚からシオンの方へ視線を移した。シオンは魚とリドルを交互に見比べて一言

「食に関して貪欲そうな感じが誰かに似てるなーと思ってさ」

「・・・誰にさ」

「そりゃあほら・・・」

シオンはその先は言わず、黙ってリドルをじーっと見ていた

「質より量・・・みたいなのところとかも」

「だから誰にさ」

「いやあ、まあそりゃあ・・・なあ？」

何故か疑問形だった。もう一度リドルをじーっと見る

じーっと見る

「俺は食うのは好きだけど、どっちかっていうと味の方に拘ってるからな」

いつまでも気付いてない様子のリドルに念を押してヒントを与えるシオン。顔が全く笑っていない、いつもと同じ眠そうな表情をしていた。

「・・・・・・・・・・は！」

数秒ほどの時間差のあと、シオンに馬鹿にされていることにリドルは気付いた

「失礼な、僕は量にも質にも拘ってますよーだー!!」

「それはもう拘ってるというよりただの食いしん坊だ」

リドルは「食いしん坊や」の称号を得た！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6015c/>

それでも世界は回ってる

2010年10月29日13時27分発行